

日々のあゆみ 第四集

目次

40章 ハの世への迎合	3
アーノルディュー・マーレー	
41章 主の日々	8
主は生きていねるがます	
42章 聖い洗礼	14
あなたがたがこの所に来るまでの、 全道中、人がその子を抱くよりに、 あなたの神、主が、あなたを抱かれた。 (申1・31)	
43章 主の聖餐 (主の晩餐)	17
44章 徒順	22
成熟を重ねて進もうではありませんか。 (ペテ6・1)	
45章 神のみいのり	27
主は聖徒たちの足を止められまく。 私は祈っています。	32
(1サム2・9)	
あなたがたの愛が真の知識となるための識別力によるて、 いよいよ豊かになつまよひ	
(ヨハニ・9)	
主は私を、すぐれた悪のやれから助け出し、 天の御國に救い入れてくださいます。 主に、御榮えがどいしゃにありますよひ	
アーメン。 (エトモト4・18)	
46章 血口否定	38
47章 思慮 (慎重)	38
48章 金錢	43
49章 キリスト者の自由	48
50章 成長	54
51章 聖書を調べる	59
52章 完成者である主	66

The believer's new life
by Andrew Murray
Copyright (c) 1965.1984
Published by Bethany House Publishers

(主は) あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

父がその子をあわれむように、主は、「自分を恐れる者をあわれまる。主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎない」とを心に留めておられる。

(詩103・5、13、14)

私が主を求めるとき、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださいました。 (詩34・4)

主は私の力、私の盾。私の心は主に拠り頼み、私は助けられた。それゆえ私の心は「おどりして喜び、私は歌をもつて、主に感謝しよう。 (詩28・7)

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。 (ピリ3・20)

あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかつた。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。

(ヨハ23・14)

その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。 (ヨハ14・17)

兄弟たち。私は、——あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。——この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によつて自分を変えなさい。

(ロマ12・1、2)

この世と調子を合わせてはいけません。しかし、この世と調子を合わせるとはどういうことでしょうか？逆は、イエスさまと調子を合わせる（似た者となる）ことです。なぜなら、イエス様とこの世は、互いに直接対立しているからです。この世は、イエス様を十字架に架けました。主とそこの弟子たちは、この世の者ではありません。この世の靈と神の靈（聖靈）は、互いに他を排斥します。この世は、神の御靈を受け入れることができません。なぜならそれは、主を目にも留めないし、主を知ることもないからです。

わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに對して何もすることはできません。

(ヨハ14・30)

さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。

(ヨハ16・11)

そしてこの世の靈あるいはこの世は、それと調子を合わせることからどんな行動が出てくるでしょうか？その出てくるものによつて、それ自身を明らかにしています。神のみことばが答えを与えていきます。

「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」 (1ヨハ2・16)

その方は、真理の御靈です。世はその方を受け入れることができます。しかし、あなたがたはその方を知っています。

楽しみを求めるとは、すなわちこの世の楽しみを渴望することです。富を切望することは、すなわちこの世を自分ものとすることを渴望することです。栄光を求めるとは、す

そしてこの世の靈とは何でしょうか？この世の靈とは、神の御靈がまだ新生成していない、生まれながらの人間を活気づけている性質です。この世の靈は、この世の王であり、神の御靈で生まれ変わつていらないすべての人々を支配している悪魔の靈に由来します。

なわちこの世で名譽を受けることを渴望することです。これらは、この世の靈の三つの主要な形態です。

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしされでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

(ヨハ2・15、16)

これらの三つは、根本と本質において一つなのです。この世の靈とは、人間が、自分自身を自分自身の目的にすることです。彼はこの世において自分自身を中心点に祭り上げます。すべての創造物は、人間の支配力が及ぶ範囲のものはすべて、人間に仕えなければなりません。彼は、見えるものに彼のいのちを求めます。これがこの世の靈です。それは、自分自身と目に見えるものを追求します。

互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めるないあなたがたは、どうして信じることができますか。

(ヨハ5・44)

イエス様の御靈による生活とは、自分自身のためや、見えるもののために生きるのではなく、神と目に見えないもののために生きる生活です。

確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

(ヨハ5・7、15)

人が忙しい生活を続け、罪や不正を明らかにすることを免れて、依然としてこの世の友であり続け、それによつて神の敵になることは、大変に恐ろしいことです。

真操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思つたら、その人は自分を神の敵としているのです。

(ヤコ4・4)

この世に対する心遣い——何を食べようか、何を飲もうか、何を持とうか、何を手に入れようか、地上で何を生じさせ、増やすことができるか——が、私たちの生活における主要な要素であるところでは、私たちは、この世と調子を合わせていてことになります。人が依然として、自分自身と目に見えるもののために、この世とともに生活しているながら、その人が「自分はキリスト者の生活の印を維持することが出来るし、キリストを信じている」と考えることは、恐ろしいことであり、非常にゆゆしいことです。

「こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知つておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

(マタ6・32～33)

このために、すべてのキリスト者に対して、非常な強調をもつてこの命令が与えられています。

「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、キリストに従いなさい。 (前半はロマ12・2) 」と。

それでは、私はどのようにしたら、この世と調子を合わせないようになることができるのでしょうか？この章のみことばを、じっくりと考えながら、何度も読み返しましょう。私は二つのことを汲み取ることができます。これまでに何があつたのかを見てみましょう。それは、祭壇の上にいけにえとして、自分のからだを神にささげた人たちです。祭壇は彼らに告げます。「この世と調子を合わせてはいけません。」と。

私たち自身を神にささげましょう。それはイエス様に従うことです。毎日、神にささげられた者として、この世に 대해서キリストにあって十字架につけられた者として、生活しましょう。そうすれば、あなたがたがこの世と調子を合わせることはなくなるでしょう。

神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の革新によって自分を変えなさい。 (ロマ12・2)

ここでは、私たちの心には継続的な更新がなければなりません。このことは、私たちが自分自身を神に導かれるようになるとき、聖靈によつてもたらされます。そのとき、何が神のみこころから来ているか、何がこの世の靈から来ているかを靈的に判断することを学ぶのです。自分の心が継続的に更新されるように努めるキリスト者は、この世と調子を合わせることはないでしょう。神の御靈が、その人をイエス様に従わせられるのです。

不信者と、つり合わぬくびきをいつしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」 (コリ6・14、16)

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあつてはなりません。この十字架によつて、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。 (ガラ6・14)

次の点も見てみましょう。

ですから、愚かにならないで、主のみ」「何はあるかを、よく悟りなさい。 (ヒペ 5・17)

キリスト者の友よ。自分自身のために生きるようにと誘惑するこの世に打ち勝つ力を、イエス様が私たちのために獲得してくださいたことを信じましょう。勝利者としてイエス様を信じ、私たちもまた、勝利を獲得していること、これを信じましょう。

わたしがこれらのことあなたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。 (ヨハ 16・33)

なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。 (1ヨハ 5・4、5)

祈り

尊い主イエス様。私たちは生きた献げ物として、自分自身をあなたにお献げました。私たちは、神に自分自身を差し出しました。あなたが、この世のものでないよう、私たちも、この世のものではありません。主よ。この世の靈が何であるのかを、私たちが正しく見ることができるよう

に、聖靈の更新によつて私たちの心を照らしてください。そして、私たちがこの世のものではなく、キリストに従う者であることが、私たちの内に見られるようにしてください。アーメン。

課題

一、この世の楽しみ
ダンスは罪ですか？社交における飲酒にどんな害があるでしょうか？キリスト者は日曜日のフットボールゲームに行つてもよいでしょうか？

ある人は「これらのこと禁止するはつきりした戒めが聖書の中に書かれていたらなあ」と思います。神は、これを意図的にはお与えになりませんでした。そのような戒めがあるなら、それは人を外面向けにだけ、信仰深くしたことでしょう。神は内面的な人、つまり、その人の内面の性質が、この世的か天的かに関心を持つておられます。ローマ人への手紙第十二章一、二節を心を込めて学び、神の御靈に、その御言葉があなたがたの中に生き続けるようにしてくださることを求めるでしょう。

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの靈的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみ

「こらは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえるために、心の一新によつて自分を変えなさい。」（ロマ12・1、2）

神に自分自身を差し出し、神の完全なみこころをわきまえるために、心の更新によつて変えられていくキリスト者は、ダンスをしてもよいかどうか、日曜日のフットボールゲームに行つてもよいかどうかを学んでいくのです。キリスト者は、神の御靈が神の子どもたちに、見るようになると与えてくださるものを見る」ことを、学ばなければなりません。

二、ヨハネの手紙にあるように、この世の神の三位一体は、エデンの園における誘惑と同様に、主イエス様の遭われた誘惑にも見られるることは注目に値します。

アダムとエバへの誘惑

肉の欲　女が見ると、その木は、まことに食べるのに良かった。

目の欲

目に慕わしかつた。

暮らし向きの自慢　賢くするというその木はいかにも好ましかつた。

イエス・キリストへの誘惑

肉の欲　この石がパンになるように、命じなさい。

目の欲

この世のすべての国々とその栄華を見せた。

暮らし向きの自慢　下に身を投げてみなさい。

この世に従う生き方から守られる唯一の道は、イエス様に従う生き方をすることだけであることを、心に留めましょう。イエス様に従うことを、あなたの魂の研究課題また努めるべきことととしましよう。

41 主の日

神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

（創2・3）

その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであつた。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめであつたが、イエスが来られ、彼らの中に立つて言われた。「平安があなたがたにあるように。」（ヨハ20・19）

私は、主の日に御靈に感じ、私のうしろにラッパの音のよう大きな声を聞いた。

（黙1・10）

人は時間の法則のもとに生きています。人が何かをしたり獲得するためには、そのために時間をかけなければなりません。神は不思議な方法で私たちに神ご自身と向き合う時間を与えてくださいます。神は私たちが神ご自身と向き合うために、週に一日を分離してくださいました。

この日を神がプレゼントしてくださった目的は、神が人を聖くしたいと熱望しておられることを表現するのに役立つてゐるよう一般に言われています。「聖」ということばを正しく知るよう努めましょう。このことばは、聖書の中でも最も大切な言葉の一つです。

神は聖なるお方です。神は、ご自身を私たちに明らかにすることによって、神が聖であることを知らせておられました。私たちは聖所が聖かつたことを知っています。なぜなら、そこに神が住んでおられたからです。神はそこを所有しておられました。それで神は、人をも聖めようとされ、神の所有とし、神ご自身で、神ご自身のいのちで、神のご性質で、神の聖さで満たされます。こういう理由で、神は第七の日（日曜日）を、ご自身のために取り分けられました。主はその日を聖められます。そして神は、人もその日を聖とし、その日が、神のご臨在と特別な働きの日として認識するようにと、召し出されました。これを行い、この日を聖別する人は、神が約束されたように、主によつて聖められるのです。

出エジプト記第三十一章十三、十七節を注意して読みましょう。（特に、十三節）

あなたはイスラエル人に告げて言え。あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるし、わたしがあなたがたを聖別する主である」とを、あなたがたが知るためのものなのである。

これは、永遠に、わたしとイスラエル人との間のしるしである。それは主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれたからである。（出31・13、17）

神の祝福は、いのちの力であり、神によってあらゆるものに宿り、祝福に満ちた結果をもたらすのです。牧草と家畜と人間を祝福され、主はみ力をもつて増やされました。

彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。」

神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえ

よ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

(創1・22、28)

そして、主が祝福する力を日曜日に宿らせました。この日を聖別するすべての人が聖別され、それによって祝福されるという約束が祝福の力です。私たちは安息日を、祝福を確実にもたらす祝福された日として考えなければなりません。安息日と関係のある祝福は非常に大きいのです。

もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を「喜びの日」と呼び、主の聖日を「はえある日」と呼び、これを尊んで旅をせず、自分の好むことを求めず、むだ口を慎むなら、そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。「わたしはあなたに地の高い所を踏み行かせ、あなたの父ヤコブのゆずりの地であなたを養う」と主の御口が語られたからである。

(イザ58・13、14)

安息日を設けることに関して用いられる三番目のみことばがあります。それは、「神は、第七日目に、…休まれた。」(創2・2)」そして同様に、出エジプト記にある、「新しくされた。」あるいは、「喜んだ」(元気になつた)

まことに主はこう仰せられる。「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶ事を選び、わたしの契約を堅く保つ宣誓たちは、わたしの家、わたしの城壁のうちで、息子、娘たちにもまさる分け前と名を与えることのない永遠の名を与える。また、主に連なつて主に仕え、主の名を愛して、そのしもべとなつた外国人がみな、安息日を守つてこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で

す。神は、私たちを主の安息に導き入れることによつて、私たちを聖別し祝福されます。神は、私たちの心配事や弱さという重荷を、私たち自身で背負うべきではないことを、私たちが理解するように導いてくださいます。私たちは、神の中に、神が成し遂げられたみわざの中に、神の安息の中に、安らうべきです。なぜなら、すべてが整えられているからです。この安息とは、仕事を外見上休むことではありません。そうではなくて、すべてが完了しているの

で神が神のみわざを終えられたように、私たちも仕事を終えるという信仰の安息です。私たちはこの安息の中に、イエス様が成し遂げられたみわざへの信仰によつて、神によつて聖別されるために自分を明け渡して、入るのです。

信じた私たちは安息にはいるのです。「わたしは、怒りをもつて誓つたように、決して彼らをわたしの安息にはいらせない。」と神が言われたとおりです。みわざは創世の初めから、もう終わつているのです。

(ヘブ4・3、10)

イエス様が、キリストの復活における第二の創造を成し遂げられて、私たちがキリストの復活の力によつていのちと安息に入ることができるようになったことにより、第七の日（日曜日）は、週の初めの日に変わつたのです。この点について特別な記述はありません。新約聖書においては、聖靈が律法に取つて代わつています。主が復活されただけではなく、あらゆる点で聖靈が注ぎ出されることを通じて、主の靈が、弟子たちをこの日の祝福へと導かれました。四十日を通して、主がご自身を明らかにされただけではなく、聖靈も特別に働かれたのです。

さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に來た。そして、墓から石が取りのけてある

のを見た。

その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであつた。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあつたが、イエスが来られ、彼らの中に立つて言われた。「平安があなたがたにあるように。」

八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといつしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立つて「平安があなたがたにあるように。」と言われた。

(ヨハ20・1、19、26)

しかし、聖靈があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

(使1・8)

週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まつた。そのときパウロは、翌日出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。

(使20・7)

この日（聖日）について私たちが学ぶべき主な課題は次の通りです。復活の主な目的は、神が聖であるように私たちを聖とするためです。神は私たちを聖なるものとされるのです。これは栄光です。これは喜びです。これは神の祝福です。これは神の安息です。神は私たちを聖なるものとし、ご自身で、神の聖で、私たちを満たそうとされるのです。

わたしの住まいは彼らとともにあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。わたしの聖所が永遠に彼らのうちにあるとき、諸国の民は、わたしがイスラエルを聖別する主であることを知ろう。

(エゼ 37・27、28)

あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」と書いてあるからです。

(1ペテ 1・15、16)

私たちを聖とするために、神は私たちを、神のご臨在と交わりの中に、神とともに居らせなければなりません。私たちは神とともに努力も不安もなく安息し、静かに安息するために、すべての苦闘と労働から離れなければなりません。そのため、御子がすべてを成し遂げてくださったこと、御父がすべてのことについて私たちの面倒をみてくださること、聖靈が私たちの中ですべてを行ってくださることを確かなこととしましよう。神に向かう静けさである魂の安息、神が自分に語られることを聴くために、神の臨在の前に静まるところの魂の安息、すべてを成し遂げるために神に拝り頼むところの魂の安息において、神はご自身を現すことがおできになるのです。

神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。
神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。

(詩62・2、6)

しかし主は、その聖なる宮におられる。全地よ。その御前に静まれ。

(ハバ 2・20)

イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した。」と言われた。そして、頭を垂れて、靈をお渡しになった。

(ヨハ 19・30)

このようにして神は私たちを聖められるのです。

私たちは、すべての外面向的な仕事や気晴らしを取りやめることによって、まず安息日を聖別します。しかし特に、それを神のものである日として用いることによって、主に属しております、神が定められたとおり神ご自身との交わりのために用いることによって、私たちは安息日を聖別するのです。

一方、私たちは、神を礼拝する公の儀式のための日としてだけに、安息日を用いるべきではないことに注意を払いましょう。神が私たちを祝福し聖別することができるのは、特に密かな個人的な交わりです。教会（集会）においては、理解が活発になされ、メッセージを聴く聴衆と、あなたの心を占める一致した祈りと賛美があります。しか

し、私たちは自分の心が本当に神に近づき、神を喜ばせているのかどうかを、いつも理解しているわけではありません。このことは、ひとり静まるときに起こることです。

ああ、ですから私たちは、私たちの神である主とひとりで交わることを、習慣としようではありませんか。神に語るだけではいけません。神に語つていただきましょう。あなたたの心を、聖い静けさの中で、神の御声を聞くことができるとしましょう。神の中に安息しなさい。そのとき神は私たちの心に語りかけられるでしょう。「これはどこしえに、わたしの安息の場所、「ここにわたしは住もう。」

（詩132・13、14）と。

新しいキリスト者の方々。この祝福された安息日の満たしを見失わないでください。この日を神に感謝しましょう。この日をとても聖なるものとして保ちましょう。そして、とりわけこの日を、あなたの神との内なる交わりの日、神の愛との生きた交わりの日としましょう。

聖なる神さま。あなたが私を聖めてくださる証しとして与えてくださっている聖なる日を感謝します。主なる神さ
祈り

あなたはこの日を、ご自身のものとして取られることによつて聖別されました。同様にあなたご自身のものとして私を取られることによつて、私を聖別してください。あなたの安息の中に入り、あなたの愛の中に私の安息を見いだすように私を教えてください。そうして、あなたがあなたご自身とあなたの愛を私に知らせてくださいるために、私

の魂が御前に静まるようにしてください。そして、すべての安息日において、あなたとともにある永遠の安息の前味を味わさせてください。アーメン。

課題

一、安息日は、恵みのすべての手段の最初のものです。それは人類の堕落の前に定められました。私たちは、その価値をどんなに高く見積もつても見積もりすぎるることはありません。

二、三位一体の神が安息日に、どんなに特別にご自身を現わしてこられたかをご覧なさい。御父はこの日に、休まれました。御子はこの日に、死からよみがえられました。御靈はご自身の特別なみわざによつてこの日を聖別されました。あなたはこの日に、神との交わりと力強いみわざを期待できるのです。

三、「聖」という言葉は何を意味するのでしょうか？安息日について、出エジプト記第三十一章十二節によつて何が表現されていますか？

あなたはイスラエル人に告げて言え。あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるし、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、あなたがたが知るためのものなのである。

（出31・13）

神はどのようにして、安息日を聖別されたのでしょうか？
神はどのようにして、私たちを聖別されるのでしょうか？

四、安息日を静まって祝うには困難が伴います。不必要なことを排除することで、安息日がその効果を十分に發揮できるようになります。

五、子どもたちのために、安息日についての適切な手本を準備することで、安息日を聖とすることについて、子どもたちを育てることは非常に重要なことです。子どもたちは、日曜学校や教会の奉仕に加わるべきです。子どもたちが両親の態度において見るものに、習うようになるのです。

六、肉体と魂のためにになることをするのに、主の日に優る日はありません。悪魔の働きをこの日に終わらせ、失われた人々や主を知らない人々のための働きが前進するようにしましょう。

七、主要なポイントは次の通りです。安息日は神の安息の日であり、神の中に神とともに安息する日であり、神と交わる日です。私たちを聖別されるのは神です。神は、私たちを所有することによってこれをなさるのです。

42 聖い洗礼

それゆえ、あなたがたは行つて、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖靈の御名によつてバプテスマを授けなさい。

信じてバプテスマを受ける者は、救われます。

（マル16・16）

洗礼を規定したこれらのみことばの中に、その意味が要約して含まれていることがわかります。「教えなさい（弟子としなさい）」というみことばは、「あらゆる国の人々を弟子として、彼らに洗礼を授けなさい」という意味です。信じている弟子たち（キリスト者）は、水に浸されるように、三位一体の神の御名の中に浸され、導き入れられなければなりません。御父の御名によつて、御父の愛の中にいる子どもとしての新しい誕生と新しいいのちが確保されるのです。

あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によつて、神の子どもです。バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。

（ガラ3・26、27）

そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御靈を、私たちの心に遣わしてくださいました。ですから、あなたがたはもはや奴隸ではなく、子で

す。子ならば、神による相続人です。（ガラ4・6、7）

御子の御名によつて、罪の赦しとキリストにあるいのちにあずかるのです。

あなたがたは、バプテスマによつてキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によつて、キリストとともによみがえらされたのです。

（コロ2・12）

聖靈の御名によつて、聖靈の内住と、継続的な更新にあずかるのです。

神は、私たちが行なつた義のわざによつてではなく、「自分のあわれみのゆえに、聖靈による、新生と更新との洗いをもつて私たちを救つてくださいました。神は、この聖靈を、私たちの救い主なるイエス・キリストによつて、私たちに豊かに注いでくださつたのです。（テト3・5、6）

そして、すべての洗礼を受けられたキリスト者は洗礼を、三位一体の神との契約への入り口として、また父、御子、聖靈が約束されたすべてのことを、やがてあなたのために成し遂げてくださることの誓いとして期待すべきです。洗礼において提供されているすべての祝福を理解して楽しむためには、生涯にわたる学びを要します。

聖書の別の箇所において、この祝福がさらにまた別に説かれています。「人は、水と御靈によつて生まれなければ、神の国にはいることができません。」（ヨハ3・5）

このみことばによつて、神の子どもとなるために必要な新生活が、洗礼と密接に関係していることを見いだします。洗礼を受けた弟子は、神において御父を持つており、この御父の愛の中に、子として生きなければなりません。

ですから洗礼は、キリストにある罪の贖いに、さらに直接に結びついているものとされています。結果として、洗礼が表現する第一の最も単純なことは、罪の赦しと罪の洗い聖めです。赦しは、いつもすべての祝福への門であり入り口です。それゆえ洗礼は、キリスト者の生活の開始の礼典であるだけではなく、全生涯を通して維持されるものの始まりでなければなりません。

ローマ人への手紙第六章において、洗礼は聖化の秘訣であり、イエス様とともにある生活への入り口であると表現されているのはこのためです。

あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。（ロマ6・3）

そして、四節から十一節には続いて、イエスの死につぎ合わされることと、キリストにある新しいのちを得るため

にキリストとともに死から復活することはどういうことのなかが、さらに明確に説明されています。このことは、次のみことばにおいて、非常に力強く説明されています。

バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。（ガラ3・27）

このことこそが、洗礼を受けたキリストの弟子の正しい生活です。私たちは、キリストをこの身に着てているのです。あなたがたは、バプテスマによつてキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によつて、キリストとともによみがえらされたのです。（コロ2・12）

信仰告白者は、キリストの新しいのちを身にまとつて生き、歩むために、キリストの死につぎ合わされているのです。

そして、他の箇所では、洗礼に結びつけて聖靈の約束が述べられています。その聖靈は、天から信じる者に与えられた贈り物としての聖靈であり、人を新生きせる御靈としてだけではなく、内住され、証印を押し、また日毎に更新してくださるお方です。

神は、…聖靈による、新生と更新との洗いをもつて私たちを救つてくださいました。神は、この聖靈を、…私たちに豊かに注いでくださったのです。 (テト3・5、6)

このみことばでは、更新は聖靈の活動です。新生によつて植え付けられた新しいのちが、聖靈によつて私たちの全存在に浸透し、私たちのすべての思いと行いが、聖靈によつて聖められるのです。

そして、洗礼の中に存在するこの豊かな祝福のすべては、信仰によつて受け取ることができるのです。
信じてバプテスマを受ける者は、救われます。

(マル16・16)

洗礼は、その人がすでに持つてゐる信仰についての人間側の告白であるだけではなく、神の側における信仰の確認の証印です。洗礼は、恵みのすべての宝庫が、生涯を通じて楽しむために開かれるという契約の印です。

洗礼を受けたキリスト者は、他の人の受洗に立ち会うたびに、また、その意味について内省するたびに、それは、神が彼の内で働かせたいと切望しておられる全き救いのいのちにあつて、絶えず成長する信仰へ進ませる励ましとなります。

御父の愛のすべてと、御子の恵みのすべてを私たちが持つために、聖靈が私たちに与えられています。キリストの死にあづかる洗礼の志願者は、キリストをその身に着たのです。聖靈は、日々の経験としてこれらすべてを与えるため

に、彼の内におられます。

しかし、その方、すなわち真理の御靈が來ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御靈は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御靈はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受け、あなたがたに知らせるからです。 (ヨハ16・13、14)

あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあつて歩みなさい。 (コロ2・6)

祈り

主なる神さま。キリストの死にあづかつてゐる経験として、あなたの聖い洗礼を私の魂の中にいつも働かせてください。そして、洗礼において、どれほど豊かな祝福が私たちに開かれているかを、あなたの民があなたの御靈によつて、どこにおいても知ることができるようにしてください。アーメン。

43 主の聖餐（主の晩餐）

私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありますか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。

（1コリ10・16）

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。…わたしを食べる者は、わたしによって生きるのです。

（ヨハ6・56、57）

すべての生き物には食物が必要です。外部から取り込まれる栄養分によって養われるのです。天のいのちは、天の食物をとらなければなりません。イエス様ご自身が、いのちのパンに他なりません。わたしを食べる者は、わたしによつて生きるのです。

イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのでなく、神の口から出る一つ一つの』とばによる。』と書いてある。」（マタ4・4）

わたしは、天から下つて来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。

（ヨハ6・51）

この天の食物であるイエス様は、恵みの二つの手段であるみことばと主の聖餐で、私たちに近づかれます。みことばは、知的な生活の側面から私たちの思考によつて、私たちの中にイエス様を現わします。同様に主の聖餐は、五感によって情緒的な側面から、私たちの中にイエス様を現わします。人間は、靈と肉の両方を持つています。贖いは、靈に始まるとしても、肉にも浸透して行くのです。贖いは、この死ぬべき肉体も栄光を分かち合うまでは、完全ではありません。

食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります。ところが神は、そのどちらをも滅ぼされます。からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです。

あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。キリストのからだを取つて遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まる、神から受けた聖靈の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

あなたがたは、代価を払つて貰い取られたのです。ですから自分のからだをもつて、神の栄光を現わしなさい。

（1コリ6・13、15、19、20）

キリストは、万物を「自身に従わせる」とできる御力によって、私たちの卑しいからだを、「自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」（ピリ3・21）

この卑しいからだが、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えられるまで、救いは完結しないのです。

主は、すべてのものをご自身のために征服されるみわざによつて、私たちの肉のからだをも変えて、主ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。主が、聖餐のパンの中に、ご自身を与えてくださつていることは、物質的であるすべてのものが、私たちにとつて明白でわかりやすいという単純な理由からだけではありません。そうではなくて、聖書は、しばしば、からだが人間全体を意味します。

聖餐の中で、キリストは人間全体すなわち肉と靈を「ご自分のもの」とされ、それを主の聖なるみからだと血潮の力によつて更新され聖化されます。主のみからだも聖靈によつて交わつているのです。私たちのからだも、主の聖なるみからだによつて養われ、聖靈のみわざによつて更新されるのです。

また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。

「取つて食べなさい。これはわたしのからだです。」

（マタ26・26）

もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御靈が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御靈によつて、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださいのです。

もし肉に従つて生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御靈によつて、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」（ロマ8・11、13）

キリストのみからだによつて養われることには、二つの側面があります。一つは、聖靈による主の側のことであり、もう一つは、信仰による私たちの側のことです。

聖靈による主の側のこと

聖靈は、栄光のからだの力を私たちに伝えます。聖書によればこの力によつて、私たちのからださえも主のみからだの一員になるのです。

なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隸も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御靈によつてバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御靈を飲む者とされたからです。」（1コリ12・13）

聖靈は、私たちが主の血潮のいのちの力を飲むようにしてくださり、血潮が私たちのいのちと魂の喜びになるようにされます。パンは、みからだにあずかることであり、さかずきは、血潮にあずかることです。

信仰によつて私たちの側に起ること

見せられたり理解させられたりするもの以上に、聖靈の驚くべきお働きの力に依存する信仰。聖靈は主を私たちの内面に伝えることによつて、私たちを主と、魂と同様にからだにおいても、本当に結び合わせられます。

神にとつて不可能なことは一つもありません。

（ルカ1・37）

まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

ところで、私たちは、この世の靈を受けたのではなく、神の御靈を受けました。それは、恵みによつて神から私たちに賜わつたものを、私たちが知るためです。

（1コリ2・9、12）

ハイデルベルク教義問答は、これを次のように説明しています。

問76 十字架につけられたキリストの体を食べ、その流された血を飲むとはどういうことですか。

答 それは、キリストのすべての苦難と死とを、信仰の心をもつて受け入れ、それによつて罪の赦しと永遠の命とをいただく、ということ。それ以上にまた、キリストのうち

にもわたしたちのうちにも住んでおられる聖靈によつて、その祝福されたみからだといよいよ一つにされてゆく、ということです。それは、この方が天におられ、わたしたちは地にいるにもかかわらず、わたしたちがこの方の肉の肉、骨の骨となり、ちようどわたしたちの体の諸部分が一つの魂によつてそうされているように、わたしたちが一つの御靈によつて永遠に生かされまた支配されるためなのです。

これはわたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。 （マタ26・28）

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。

（ヨハ6・56）

イエス様のみからだと血潮にさえもあずかる、主とのこの深い内面の結合は、主の聖餐の偉大な目的です。聖餐が私たちに教えて与えるすべてのものは、罪の赦しであり、イエス様を覚えることであり、神の契約を確認することであり、私たちが互いに結び合わされることであり、主が来られるときまで主の死を告げ知らせることであつて、そのすべては、聖靈を通して、イエス様と完全に一つになることに導かれなければなりません。

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。わたしを

食べる者も、わたしによつて生きるのです。

(マハ6・56、57)

パンは一つですから、私たちは、多数であつても、一つのからだです。それは、みんなの者がともに一つのパンを食べるからです。

(1コリ10・17)

ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。

(1コリ11・26)

見よ。わたしは、戸の外に立つてたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいつて、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(黙3・20)

聖餐の祝福は、奥まつた部屋での準備と、飢え渴きをもつて生ける神を待ち望むことに、深く依存していることは、すぐに分かります。

ああ。渴いている者はみな、水を求めて出て來い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物をかい、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。耳を傾け、わたしのところに出て來い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたとどこしえの契約、ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。

(イザ55・1、3)

義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。

(マタ5・6)

けれども、聖餐を、私たちがみことばの中に信仰によつてすでに持つていることの、象徴的な表現に過ぎないと考へてはなりません。そうではなくて、天に高く上げられた主からの、主のいのちの力についての、実際の靈的な伝達です。しかも、これは熱意と信仰のはかりにのみ従うのです。それゆえ、熱意をもつて自分自身を取り分け、祈りつつ、主の聖餐に備えましょう。そして、主が、ご自身の天の力で、あなたに理解できない、しかし確かな方法で、あなたのいのちを更新しようとしておられることを期待しましょう。

祈り

祝福に満ちた主よ。あなたは、ご自身が贖われた者たちのための食物であり、いのちの力であることを伝えるために、聖餐を制定されました。聖餐を用いることを私たちに教えてください。聖餐のたびごとに、あなたご自身を求めるあなたとの完全な結合を求める、飢え渴いた心で食べまた飲むことを、聖靈が私たちにあなたのみからだを食べさせてください、あなたの血潮を飲ませてくださいることを信じつつ与ることを教えてください。アーメン

課題

一、聖餐について、これは他の教会で行われているような儀式である、あるいは感情をかき立てる儀式であると

いう考えを警戒しましよう。説教と信仰宣言は啓発的であるという印象を与えるかもしれません、力や祝福がほとんどありません。

二、食物に関して、第一の要件は飢えです。神に対する強い飢え渴きは必要不可欠です。

三、聖餐の中で、イエス様は、ご自身を私たちに与えたいと切望しておられ、私たちが自分自身を主に差し出すことを望んでおられます。これらこそ大切であり、また聖なることです。

四、聖餐について学ぶことは多くあります。聖餐は、記念の祝宴、聖めの祝宴、契約の祝宴、愛の祝宴、希望の祝宴です。しかし、これらのそれぞれの考えは、基本要素に付随する部分に過ぎません。生きておられる主イエス様は、最も内的な結合を通して、ご自身を私たちに与えてくださいます。神の御子は、私たちの最も奥深い部分にまで降りて来てくださるのです。主は、聖餐を私たちとともに祝うために、入つて来てくださいます。

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。

(ヨハ6・56)

五、そして、イエス様との結合は、主の民との愛と思いやりの結合です。

六、準備的な勧めのことばは、それ自身準備でなく、人がイエス様と親しく交わるために持つべき個人的準備への助けにすぎません。

七、主の食卓で主と饗宴をともにすることは、言葉に尽くせない重要なことがらです。私たちがキリスト者であるがゆえに、そこへ行つて席に座ることは簡単なことである、と考えてはなりません。そうではなくて、イエス様と二人だけになりなさい。そうして、あなたが主とともに、そうです主ご自身とともに食するためには、どのように備えればよいか、主があなたに語りかけることができるようになさい。

44 徒順

り、あるいは徒順の奴隸となつて義に至るのです。

(ロマ6・16)

今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従うなら、あなたがたはすべての國々の民の中につつて、わたしの宝となる。

(出19・5)

主は、必ずあなたを祝福される。ただ、あなたは、あなたの神、主の御声によく聞き従うなければならない。

(申15・4、5)

信仰によつて、アブラハムは…出て行きました。

(ヘブ11・8)

キリストは御子であられるのに、お受けになつた多くの苦しみによつて徒順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となれたのです。

(ヘブ5・8、9)

徒順は、キリスト者の生活において、最も大切なことばの一つです。人が神の愛顧と神のいのちを失つたのは、不従順を通してでした。その神の愛顧と神のいのちを再び享受することができるのは、ただ徒順の道を通してだけなのです。

あなたがたは「このことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隸として服従すれば、その服従する相手の奴隸であつて、あるいは罪の奴隸となつて死に至

父なる神の予知に従い、御靈の聖めによつて、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にますます豊かにされますように。

徒順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、あなたがたは、真理に従うことによつて、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合ひなさい。

(1ペテ1・2、14、22)

神は、不従順な人々をお喜びになれないだけではなく、そのような人々に祝福をお与えになれないのです。

「もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、あなたの神、主の御声によく聞き従うなら…」

(出19・5、申15・5)

これらは、人がどのようにして神の愛顧と祝福を享受することができるかを明確にしている永遠の原理です。私たちは、これを主イエス様の内に見ることができます。主は次のように言われます。

「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわた

しの父の戒めを守つて、わたしの父の愛の中のことどまつて
いるのと同じです。」 (ヨハ15・10)

主は、御父の愛の中におられましたが、従順によつてだけ
そこにとどまつことがおできになりました。そして、これ
が同じく私たちにとつても、主の愛の中にとどまるための
唯一の道であると、主は言つておられるのです。私たち
は、主の命令を守らなければなりません。主は、私たちの
ために、神に立ち帰る道を開くために来てくださいまし
た。この道は従順の道でした。そして、イエス様を信じる
信仰を通して、従順の道を歩む者だけが神のもとに来るの
です。

するとサムエルは言つた。「主は主の御声に聞き従う」と
ほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれる
だらうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳
を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」

(1サム15・22)

もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがた
はわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたし
の父の戒めを守つて、わたしの父の愛の中のことどまつてい
るのと同じです。」 (ヨハ15・10)

イエス様の従順と私たちの従順の間にあるこの関連は、ヘ
ブル人への手紙第五章に述べられています。

キリストは「…従順を学び、…彼に従うすべての人々に
対して、としえの救いを与える者となられたのです。」
(ヘブ5・8、9)

これが、イエス様と主の民とを結ぶきずなであり、服従すべき点であり、内面での一致です。主は御父に従順でした。一方、主の民は主に従順です。主と主の民はともに従順です。主の従順は、罪を贖われただけではなく、主の民の不従順を追い出されます。主と主の民は、一つの印を、すなわち神への従順という印を帶びています。

神に感謝すべき」とには、あなたがたは、もとは罪の奴隸
でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から
解放されて、義の奴隸となつたのです。

(ロマ6・17、18)

キリストは人としての性質をもつて現われ、自分を卑しく
し、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたので
す。」 (ビリ2・8)

この従順は、信仰生活の特徴です。それは信仰の従順と呼
ばれています。

「このキリストによつて、私たちは恵みと使徒の務めを受け
ました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信
仰の従順をもたらすためなのです。」 (ロマ1・5)

私の福音とイエス・キリストの宣教によつて、すなわち、世々にわたつて長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によつて、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によつて、あなたがたを堅く立たせることができる方、

(ロマ16・25、26)

地上のもので、信仰と同じほどに人を働きへと駆り立てるものはありません。有益さや喜びの伴う信仰は、すべての働きの秘訣です。

「信仰によつて、アブラハムは、…召しを受けたとき、これに従い…ました。」
(ヘブ11・8)

私の働きは、私が信じるとおりになつていきます。イエス様が、私が従順であるために、私を罪の力から解放し、従順の生活を備えてくださつているという信仰は、私を従順にする強力な力です。御父が与えてくださる祝福に満ち溢れた信仰、神の愛と内住の約束を信じる信仰、この水路を通してやつてくる聖靈の満たしを信じる信仰、この信仰が従順を強化するのです。

もし、あなたが、あなたの神、主の御声によく聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を守り行なうなら、あなたの神、主は、地のすべての国々の上にあなたを高くあげられよう。

(申28・1)

わたしが父におり、父がわたしにおられるときわたしが言ったのを信じなさい。

さもなければ、わざによつて信じなさい。もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。

イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」

(ヨハ14・11、15、23)
私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになつた聖靈もそのことの証人です。

(ヨハ14・11、15、23)

信仰の力は、従順の力と同様に、とりわけ生ける神ご自身との交わりの中にあるのです。「御声に従う」とこと、「御声に従う」とこと、「御声を聞く」とことは、ヘブライ語では同じ一つのことばで表現されます。それは、正しく聞くことが、従うことへの前段階だからです。

人間や書物の言葉によつてではなく、神の御声を聞いて、神ご自身から神のみこころを学ぶとき、私は約束を確信し、命じられていることを行うようになります。聖靈は神の御声です。私たちが、生ける御声を聞くとき、従順は容易になります。

その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

アブラムは主がお告げになつたとおりに出かけた。ロアも彼といつしょに出かけた。アブラムがカラムを出たときは、七十五歳であった。

(創12・1、4)

するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つれませんでした。でもおことばどおり、綱をおろしてみましょ。」 (ルカ5・5)

彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立つて行きます。すると羊は、彼の声を知つてゐるので、彼について行きます。

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知つています。そして彼らはわたしについて来ます。

(ヨハ10・4、27)

どうか、主が主の聖靈によつて語つてくださるよう、私たちには静まつて神を待ち望み、主の御前に私たちの魂を解放しようではありませんか。私たちの聖書朗読と祈りにおいて、私たちが、「私の神がこれを私に語つてくださり、この約束を私に与えてください、こう命じられた。」と言つて従うことができるよう、私たちは神をさらに待ち望むことを学ぶのです。熱心に、努めて「御声に聞き入る」ことは、従順への確かな道です。

召使い、兵士、子ども、家来にとつて、従順は不可欠であり、完全さの第一の印です。それなのに神が、生ける、栄光に満ちた神が、私たちの内に、何の従順も見出されないということがあるのでしょうか? いいえ。初めから喜んで即座に正確に服従することをもつて、その従順をもつて私

たちのいのちであられる御子と私たちとの交わりが眞実であることの印としましよう。

子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。——万軍の主は、あなたがたに仰せられる。——わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。「どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。」と。

(マラ1・6)

わたしに向かつて、「主よ、主よ。」と言つう者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がいるのです。

(マタ7・21)

祈り

父なる神さま。あなたは私たちを、キリストにあつてあなたの子どもとしてくださいました。あなたは、主が従順であられたように、私たちを主にあつて従順な子どもとしてくださいます。聖靈によつて、イエス様の従順を私たちに榮光と力あるものとしてください、従順であることが私たちの生活のこの上ない喜びとなりますように。すべてのことにおいて、あなたが望んでおられることだけを尋ね求めそれを行うことを、私に教えてください。アーメン。

課題

従順の生活のためには、次のことが求められています。

一、断固たる自己放棄

すべての単純な事柄において、私はもはやこのように尋ねる必要はありません。「従順のために、私はどうすべきか? どうしてはいけないか? 何が義務か? 何が可能か?」 そうではなくて、私は従順である以外に何も知らないことが、疑う余地のないこととなるべきです。この性質を持ち、従順を堅く立つべきことと考へる人は、それが容易であることを知るようになり、そうです、文字通り、従順であることに大いなる喜びを味わうようになるのです。

二、聖霊を通して、神のみこころを知ること
ある程度聖書を知っているゆえに、神のみこころがわかると考えてはなりません。神のみこころを理解することは、靈的なことがらです。聖霊に、神のみこころを理解させていただきなさい。

三、正しいと知つていて、すべてのことを行ふこと
すべての行いは人々に教えています。正しいことを行うことはすべて、人々に従順を教えています。実際、みことばや良心や聖霊が私たちに正しいと告げることを、すべて行いなさい。これは、行いにおいて聖い習慣が形成される助けとなり、さらなる力と理解に導く訓練となります。

四、キリストの力を信じること

あなたは従う力を持っています。このことを確かなこととしましよう。それをあなたが感じなくても、信仰によってあなたの主キリストの内に持つていてください。

五、従順の祝福に対する喜ばしい確信
それは私たちを、私たちの神と結び合わせます。それは主の素晴らしい喜びと愛を勝ち取ります。それは私たちのいのちを強めます。それは天の祝福を私たちの心にもたらします。

神への従順のために正しいことを行いましょう。そうすれば、私たちは祝福されるのです。

45 神のみこころ

御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように行なわれますように。

(マタ6・10)

御父が住んでおられる天の栄光は、そこで主のみこころがなされるということです。天の祝福を味わおうとする人は、そこにおられて、みこころが天で行なわれるように行なわれる御父を知らなければなりません。

地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もいない。

(ダニ4・35)

天は永遠の聖なる王国であり、神の御座はその中心です。この御座のまわりには、数え切れないほどの清らかで自由な存在があり、権力と支配のもとに、すべてが統べ治められています。表現することのできない豊かで多面的な活動が、彼らの生活を満たしています。人が現在占有しているすべての最も高遠で気高いものでも、この目に見えない世界では、役目を見出しえない弱い陰のようなものに過ぎません。これらのすべての存在は、それぞれの自由な意志を持つています。けれども、その意志は、自由を自覚しつつも、彼ら自身の選択によって、聖なる御父の聖なるみこころとひとつになり、数限りない表れ方できらめく多様性の

ただ中において、一つのみこころ、神のみこころだけが成し遂げられるのです。天の住人の豊かな、祝福された活動は神のみこころにその起源と目的を持つているのです。

それでは、地上の神の子どもたちが、神のみこころを自分たちの最高の喜びと考えないのはなぜなのでしょうか？「あなたのみこころが天において行われるよう」(地において)なされますように」という祈りが、なぜ多くの信者たちにとつては、神のみこころは厳しいという考え方や、神のみこころを私たちがいつも喜んでいることは不可能だという考え方と繋がっているのはなぜでしようか。

その理由はこうです。私たちは神のみこころを、神の栄光と美しさとして知ろうと、力を尽くさないのです。すなわち、神の愛の表現として、力と喜びの源泉として、神の完全さの表れとしてです。私たちは神のみこころを、私たちが守ることのできない律法として、あるいは、私たち自身の意志と葛藤を起こすように見える試練であるかのように考えてしまいます。

もうこういう考え方をするのではなく、神のみこころの中には神のすべての愛と祝福が含まれていること、そして私たちはそれを受け取ることができるということを理解するように努めようではありませんか。

キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のために「自身をお捨てになりました。私

たちの神であり父である方のみ」「るによつたのです。

(ガラ1・4)

神は、ただみ」「るのままに、私たちをイエス・キリストによつて「自分の子にしようと、愛をもつてあらかじめ定めておられたのです。」

み」「るの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになつた「計画によることであつて、」

私たちは彼にあつて御國を受け継ぐ者ともなつたのです。私たちは、み」「るにより「計画のままをみな実現される方の目的に従つて、このようにあらかじめ定められていました。

(Hペ1・5、9、11)

神のみ」「るについて、また神のみ」「るにおいて私のために定められている栄光あることがらについて、みことばが何と告げているかを聞きなさい。

わたしの父のみ」「るは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つ」とです。

(ヨハ6・40)

神のみ」「るは、キリストを信じる信仰によつて罪人が救わされることです。失われた魂を探し求めようと願い、この

輝かしいみ」「るに自分自身を明け渡す人は、他の人々にに対する働きを神が祝福されることを確信するようになります。それはその人が、まさにイエス様がされたように、神のみ」「るを実行するからです。

イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみ」「るを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」

(マハ4・34)

この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にありますあなたがたの父のみ」「るではありません。

(マタイ18・14)

神のみ」「るは、神の子どもたちの最も弱い人たちを支え、強め、守ることです。このみ」「るを自分のものとする人には、何という勇気が与えられることでしょう。

神のみ」「るは、あなたがたが聖くなる」とです。

(1テサ4・3)

神は、神のみ」「るのすべてで、神の全意志力をもつて、私たちを聖めようとしておられます。私たちが心を開いて次のことを行つておられるなら、すなわち、聖潔が律法ではなくて神のみ」「るなのであって、私たちが主に許すところでは、主は確かに聖めてくださるのだ、と信じるなら、その時私たちは自らの聖化を、強固で確実なものであると喜ぶようになるでしょう。

神のみ」「るは、あなたがたが聖くなる」とです。あなたがたが不品行を避け、

平和の神」「自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責

められるところのないよう、あなたがたの靈、たまし
い、からだが完全に守られますように。

あなたがたを召された方は眞実ですから、きっとそのこと
をしてくださいます。（1テサ4・3、5・23、24）

すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・
イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることで
す。（1テサ5・18）

喜びに溢れ、感謝に満ちた人生は、神が私たちのためにあ
らかじめ定めてくださったことであり、主が私たちの内で
働いてくださることであり、主が望んでおられることがで
り、自分たちの上に主のみこころが働くように、逆らうこと
となく受け入れる人々に、主が確かになしてくださること
です。

そこで、私たちが必要とすることは、私たちの魂を明け渡
して、次のような考えに満たされることです。すなわちそ
の考えとは、私たちが神に抵抗しないときに、神はそのみ
こころを確實に成就してくださるということです。そし
て、もし、私たちが神のみこころがいかに栄光に満ち、適
切で、完全なものであるかをよくよく考えるなら、私たち
は、このみこころが私たちに成就されるように、心から自
分自身を明け渡すべきではないでしょうか？

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神
のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け
入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一
新によって自分を変えなさい。（ロマ12・2）

わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言ふ者がみな天の
御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこ
ころを行なう者がはいるのです。（マタ7・21）

天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれで
も、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。（マタ12・
50）

神は、罪人の言ふことはお聞きになりません。しかし、だ
れでも神を敬い、そのみこころを行なうなら、神はその人
の言ふことを聞いて下さると、私たちは知っています。

（ヨハ9・31）

人の「きげん」とのよがな、うわべだけの仕え方でなく、
キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ないな
さい。（エペ6・6）

神のみこころを行うことから成る天の栄光について考えましょう。そして、私たちの地上の人生も同様であると受け取りましょう。祈りと默想を通して、神のみこころを理解するため、私たち自身が聖霊の導きを受け取るようになります。

「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる靈的な知恵と理解力によつて、神のみこころに関する眞の知識に満たされますように。」（コロ1・9）

イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを行なう私たちのうちに行ない、あなたがたがみこころを行なうことができるため、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

（ヘブ13・21）

このように、輝かしい天における神のみこころを、みことばによつて知ることを学び、行なうなら、その時、みこころが私たちの性質に反するように見えて、このみこころに耐えることは、困難とはならないでしょう。神と神のみこころを崇拜する心で満たされて、すべてのことにおいてこの神のみこころを見て、これを認め、これを愛するようになります。そして私たちの人生において、そ

ここに神のみこころが知られず尊ばれるべきでないことがらは、何も、実に何も存在しないということが、私たちの人生において最も輝かしい考え方となることでしょう。

それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈つて言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去させてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさつてください。」（マタ26・39）

祈り私の父なる神さま。イエス様がご自身の思いを行わないで、御父のみこころを行なわれたことは、イエス様の栄光であります。この主の栄光を、私は自分のものとして持つことを望みます。お父さま。あなたのみこころの完全性と栄光を、そしてみこころの中にあるいのちの栄光を知ることができるように、私の目と心を開いてください。

あなたのみこころを理解し、喜び勇んでそれを実行できるように教えてください。そして、それを私が聞くべきところでは、愛慕の心からもそれを実行することができるようにな教えてください。アーメン。

課題

一、順境のときに、神のみこころを心から実行すること
は、逆境のときに、心からこの神のみこころに耐えるよう
になる唯一の道です。

二、神のみこころを行うために、それを靈的に知らなければなりません。聖靈の光と力は共に進みます。御靈は確かに、神のみこころとして知るように教えることのすべてを、行うように教えられます。ローマ人への手紙第十二章二節のみことばを、じっくり默想し、神のみこころを正確に理解できるように熱心に祈りましょう。

三、たとえ、人間が私たちにできる最悪のことを私たちが受けた場合であっても、神のみこころを崇めることを学びましょう。人が罪深いことをするのは、神のみこころではなく、人が罪を犯すとき、それによつて私たちが神の子どもであることが証明されることが神のみこころなのです。そこで、最も大きな試みのときと同様に、小さな試みにおいても、いつもこう言いましょう。「私がこの困難に遭っているのは神のみこころです」と。これによつて、魂に安らぎと静けさがもたらされ、試みの中において神を崇めることを教えてくれるのです。

四、神が人にみこころを与えるとき、神はその人に神のみこころを受け取ることも拒否することができる力を与えられます。新しいキリスト者の方々、神のみこころを全力で受け取り、神のみこころで満たされたために、私た

ちの意志を開きましょう。「私の意志は神のみこころと調和している。神のみこころが私の内に生きている」ということを毎日意識することは、天的な栄光であり祝福です。神のみこころを私たちの内に働かせることが神のみこころなのです。

46 白「」否定

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

(マタ16・24)

自己否定は、主イエス様がしばしば語られた課題です。主は、すべての真の弟子の欠くことのできないしるしとして、これを数回述べられました。主は、これを十字架を負うことといのちを失うこととに結びつけられました。

自分の十字架を負つてわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失つた者は、それを自分のものとします。

(マタ10・38、39)

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままで。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保つて永遠のいのちに至るのです。

(マハ12・24、25)

私たちの古いいのちがあまりにも罪深かつたために、キリストとともに十字架に架けられなければならなかつたので

す。それゆえ、新いいのちが、神のいのちが、私たちを自由に支配できるように、それは否定され避けられなければなりません。

もし肉に従つて生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御靈によつて、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

(ロマ8・13)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のために「自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によつているのです。

(ガラ2・20)

ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまひなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。

(コロ3・5)

新しいキリスト者の方々。私たちは、主のみことばに従つて、最初から自分自身を完全に否定することを選びました。最初は、それは厳しく思えるかも知れません。しかし、やがてそれが考えられないほどの祝福の源であることがわかるようになるのです。自己否定を、私たちの肉的な判断にまで届かせましょう。ペテロが肉の思いに従つて語つたとき、主は彼にこう言わなければなりませんでした。

「あなたは神の」とを思はないで、人の「とを思つてい
る。」（マタ16・23）と。

あなたは、自分自身と自分自身の考えを否定しなければなりません。私たちは次のことに注意深くあらねばなりません。みことばを理解するための取り組みと祈りは、神のみこころを知ろうと努めることで、靈と真理からはずれた神認識によつて欺かることから守られるのです。あなたの肉の理解を否定し、それを黙らせなさい。

聖なる静けさの中で、聖靈に席を譲り、神の御声があなたの心に聞こえるようにしましよう。

しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思はないで、人のことを思つてゐる。」

（マタ16・23）

渴望し欲求するすべてのものとともに、私たち自身の意志も否定しましよう。あらゆることにおいて、神のみこころがあなたの選択するものであることを、きつぱりと疑問の余地のないこととしましよう。ですから、神のみこころと一致しないすべての願望は死に渡されなければなりません。神のみこころの中に天の祝福があること、それゆえ、自己否定は最初だけ厳しく思われるということを信じましよう。しかし、私たちが心からその訓練をすると、神のみこころは大きな喜びに変わるのである。

肉のからだをそのいのちとともに、自己否定の法則のもとに置きましょう。

また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

（ロマ6・13）

私たち自身の名譽も否定しましよう。それを求めないで、神の誉れを求めましょう。それは、魂に大きな安らぎをもたらします。たとえ、私たちの名譽が傷つけられ、ののしられても、それを見張つておられる神に委ねるのです。小さくなり、取るに足りない者になることを喜びましよう。

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

（マタ5・3）

互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。

（ヨハ5・44）

しかし、わたしはわたしの栄誉を求めません。それをお求めになり、さばきをなさる方がおられます。

（ヨハ8・50）

私たち自身の力も同様に否定しましよう。神が用いることがお出来になるのは、弱い人々、取るに足りない人々であ

るということを、深く確信し理解しましよう。神を礼拝するとき、たとえそれらが心からのものであっても、自分自身の努力に警戒しましよう。たとえ私たちが力を持つているように感じても、神の御前で自分は力を持たず、あなたの力は無に等しいことを告げましよう。絶えず自分自身の力を否定することは、神の力を享受する道です。聖霊は、自分自身の力に対して死んでいる心にこそ、来て住まれ、神の力をもたらされるのです。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

（2コリ12・9）

特に自分自身の興味を否定しましよう。自分自身を喜ばせるためではなく、自分の隣人を喜ばせるために生きます。自分自身の人生を探求する人は、それを失います。自分自身のために生きる人は、いのちを見出しません。しかし、主の喜びを分かちあうために、真にイエス様にならおうとする人は、主がされたように自分のいのちを与え、自分自身の興味を献げるのです。

私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。キリストでさえ、「自身を喜ばせる」とはなさらなかつたのです。むしろ、「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふり

かかった。」と書いてあるとおりです。

（ロマ15・1、3）

また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、「自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおさげになりました。

（エペ5・2）

回心したとき、あなたは、自分自身に従うか、キリストに従うかの選択をしなければなりませんでした。そのときあなたは言いました。「自分ではなく、キリストに従います」と。今やあなたは、この選択を毎日確かなものとしなければなりません。あなたがそうすればそうするほど、あなたにとつて、罪深い自己を放棄し、不浄な自分の働きを捨て去り、そしてイエス様をすべてとすることが、より喜ばしいこととなり、祝福されたこととなるのです。自己否定の道は、深い天の祝福の道です。

このように生きていよい、非常に多くのキリスト者がいます。彼らはイエス様を、さばきから解放してくださるお方としては受け取っていますが、自分自身から、自分自身の意志から解放されるお方としては受け取つていません。しかし、弟子になることへの招きの鐘は、今も絶えず鳴り響いています。

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

(マタ16・24)

自己否定の力と同様に、自己否定の理由は、「わたしに」という小さな言葉の中に見出されます。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、⋮そしてわたしについて来なさい。」古いいのちは私たちの内にあり、新しいのちはイエス様の内にあります。新しいのちは、古いいのちを追い出さなければ、支配することができません。自我がすべてを自己主張するところでは、何も起らないでしょう。この点で、日々自分自身を否定し、イエス様にならう生活がなければなりません。私たちは、主の教え、主のみこころ、主の誉れ、主の関心で心が満たされなければなりません。しかし、主を受け入れ、主を知っている人は、進んで自分自身を否定します。キリストが、彼にとつてあまりにも高価であるため、その人はすべてのものを、自分自身でさえも犠牲にして、主を自分のものとします。

これが本当の信仰生活です。私は、生まれながらの性質が受け入れて、見たり考えたりすることに従うのではなく、イエス様が何と言つておられるか、何を望んでおられるかに従つて生活します。毎日、毎時間、次のすばらしい契約を確認します。

「私ではなく、キリスト」私は何ものでもなく、キリストこそすべてです。

「あなたは死んだ」もはや私は、力も意志も榮誉も持つてはいません。

「あなたのいのちは、神の中にキリストとともに隠されている」キリストの力とみこころだけが勝利するのです。どうか、栄光に満ちたキリストがあなたの内に住んでくださいるために、あの罪深い惨めな自己を、喜んで否定しましよう。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、「この世に生きているのは、私を愛し私のために」自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によつているのです。

(ガラ2・20)

しかし、私にとつて得であつた「のようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知つていることのすばらしさのゆえに、いつさいのことを損と思つています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」 (ピリ3・7、8)

祈り

尊い救い主よ。自己否定とは何かを私に教えてください。自分の心を信用することでどんな空想的な考えにも屈してしまわないように、私を教えてください。

あなたとあなたのいのちを持つために自分自身をお献げする以外私には不可能であるというほどに、私があなたを知ることができます。あなたを教えることができるよう教えてください。アーメン。

課題

一、「自然的な理解」の否定に関して、テルステーゲン（L. Tersteegen）は次のように述べています。

「神と神の真理は、その人の生まれつきの性質すなわち、傾向や感情や意志に死ぬこと以外では、正しく知ることは決してできません。神と神の真理を知ることは、熱意と静けさの中で、理解しようと突き詰めて考えることを捨てるなら、非常に単純で子どもらしいこととなるのです。私たちは、あらゆることについての自分の意志を放棄して、私たちの心と意志をすっかり神に渡し、たとえ靈的な事柄についてであっても、よく理解しようとあれこれ想像したり考えを巡らしたりすることから自分自身を解放しなければなりません。そうすることで、神の真理は心の中にそれ自身で静かに集合し、神とともに心の中に宿るのであります。神の知識の本当の理解は、頭の中にではなく、心の中に与えられるのです。

頭の中には、真理についての不毛の考えが生じ、心の中には、生きた真理それ自身が、私たちにすべてのことを教える油注ぎが見出されるのです。心の中には、生きた光の泉が見出されます。神を喜び楽しむ心に生きる人は誰でも、最大の努力をする人より、しばしばもつと多くの真理を目で見分けるようになります。」

二、前の文章を注意して読みましょう。私たちが聖書を読んだり祈つたりするとき、私たちはそのたびごとにしばらく静まって、神の御前に完全な静けさの中に自分を置くべきことを数回にわたって述べてきた理由がそこにあります。神が語つてくださるように、生来の理解しがわかります。神が語つてくださるように、生来の理解しが必要です。靈とまことによつて礼拝を行う神殿は心の中になります。靈的な事柄においては、私たちの理解力を信頼せず、拒否しましよう。生来の理解力は頭の中になります。おお、神殿の中で、神の御顔の御前で聖なる静けさを保ちましょう。そうすれば、神は語つてくださいます。

三、「キリスト者の自己否定の特有な印は、内面の快活さであり、困難のさなかにあつての喜びです。神のみことばは、絶えることのない喜びを当然のこととしています。この喜びに満ちた気質は、永遠から來るのであつて、すべての変化や移り変わりを足下に置き、厳しい困難のときだけではなく、毎日毎時間の自己否定のときにも、キリストの

いのちから引き離されることはない、という土台を持つのです。」

四、何を私は否定するべきでしようか？私たち自身を否定しましよう。いつ、どこで自分を否定すべきかは、どのようにしてわかるのでしょうか？いつでも、すべてのことにおいてそうするのです。そして、もし、答えが正しく理解できないならば、イエス様ご自身以外には誰も、それについて正しい説明をあなたに与えることが出来ないことを知りましよう。主にならうこと、主について教えられることは、自己否定への唯一の道です。主イエス様が入って来られるときにだけ、私自身が出て行くのです。

47 思慮（慎重さ）

知恵があなたの心にはいり、知識があなたのたましいを樂しませるからだ。思慮があなたを守り、英知があなたを保つ。

（箴2・10、11）

わが子よ。すぐれた知性と思慮とをよく見張り、これらを見失うな。それらは、あなたのたましいのいのちと…なる。

（箴3・21、22）

皆さんは静かにして、軽はずみなことをしないようにしなければいけません。

（使19・36）

軽率は、いまだ信仰に至つてない人の罪というだけのことではありません。神の民の中において、それがしばしば多くの邪悪や悲惨の原因になります。モーセに関してこう書かれています。

彼らはさらずにメリバの水のほとりで主を怒らせた。それで、モーセは彼らのためにわざわいをこうむつた。彼らが主の心に逆らつたとき、彼が軽率なことを口にしたからである。

（詩106・32、33）

ウザが契約の箱に触れたことについてもこう書かれています。

誘惑に陥らないように、目をさまして、祈つていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。

（マタ26・41）

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御靈によつて祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

（Hペ6・18）

神は、その不敬の罪（軽率）のために、彼をその場で打たれた。

（2サム6・7）

思慮（慎重さ）とは何か？また、それはなぜそんなに必要なのか？ということについては、説明するのは簡単かも知れません。軍隊が敵の地域に向けて行進するとき、その安全は、設置されている警備隊に依存しています。警備隊は、敵が近づくのを知つて警報を出すために常に監視する任務を持っているのです。前衛の警備隊は、敵の支配領域と力を知るために派遣されます。前もつて見張り、状況を考慮するこの慎重さは、欠くことができません。

キリスト者は敵の陣地に住んでいます。私たちを取り囲むすべてが、わなとなり罪の原因になるかも知れません。それゆえ、私たちがどんな軽率なこともすることのないようになに、私たちの歩みのすべては、聖い慎みと注意深さの中になされなければなりません。私たちは、誘惑に陥らないよう常に警戒し、祈ります。慎み深さは私たちを守ってくれます。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを搜し求めながら、歩き回っています。 (1ペテ5・8)

いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようになおでありなさい。 (マタ10・16)

そういうわけですから、賢くない人のようにではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意しない。 (エペ5・15)

思慮は唇を警戒し続けます。神の民が、悪いことを何も話さない限り、欲していることを話してもよいという考えによつて、いかに多くの損失を被つていることでしょう。そ

の人は、多くを話すことによつて、魂がこの世の気晴らしに陥るようになることを知らないのです。なぜなら、おびただしい量の言葉には、罪以外には何もないからです。思慮は、神の栄光と隣人の祝福のため以外には話さないよう努めます。

主よ。私の口に見張りを置き、私のぐちびるの戸を守つてください。 (詩141・3)

「とば数が多い」と「るには、そむきの罪がつきもの。自分のぐちびるを制する者は思慮がある。 (箴10・19)

思慮は耳をも警戒し続けます。耳の入り口を通して、この世のあらゆる情報や他人のあらゆる無分別な言葉が入つてきて、それらは私たちを汚染することもできるのです。情報を探し熱望することは、魂にとつて大変有害です。コリントはアテネより不信仰でした。しかしこのアテネで、彼らはみな「何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、口を過ごしていた。」 (使17・21) のであり、ほんの僅かの人々だけが回心したのです。イエス様は「聞いていることに注意しなさい」 (マルコ4・24) と言われました。

あなたの耳を知恵に傾け、あなたの心を英知に向けるなら、悟りのある者の心は知識を得、知恵のある者の耳は知識を求める。 (箴2・2、18・15)

この点で、キリスト者がつき合う社会を慎重に見張りましょ。神の子どもは、何回もいつまでも自分が望むだけ、この世の社会に自分を差し出す自由を持つていません。彼は、御父のみこころを知らなければなりません。

幸いな」とよ。悪者はばかり」と歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。 (詩1・1)

おのれを閉ざす者は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいする。 (箴18・1)

不信者と、つり合わぬくびきをいつしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

(2コリ6・14)

もし、この手紙に書いた私たちの指示に従わない者があれば、そのような人には、特に注意を払い、交際しないようにしなさい。彼が恥じ入るようになるためです。

(2テサ3・14)

慎重さは、すべての仕事と所有することが合法的であるかどうかを見張り続けます。慎重さは、金銭を愛すること、この世に浸ること、肉の密かな力が、どのようにして徐々にかつ密かに私たちの中で優勢となるか、そしてこの誘惑から、自力では決して逃れることができないようになつてしまふのかを知っています。

また、いばらの中に時かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。 (マタ13・22)

あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなた

たがたに臨む」とのないよう、よく気をつけていなさい。 (ルカ21・34)

そして、中でも、慎重さは心を見張ります。なぜならそこには、いのちについての核心があるのであり、すべてのものが湧き出る泉があるのです。このみことばを心に留めましょう。

自分の心に頼る者は愚かな者である。 (箴28・26)

慎重さは、深い謙遜の中を歩み、恐れおののいて救いを成就するのです。

わが子よ。すぐれた知性と思慮とをよく見張り、これらを見失うな。それらは、あなたのたましいのいのちとなり、あなたの首の麗しさとなる。こうして、あなたは安らかに自分の道を歩み、あなたの足はつまずかない。

(箴3・21～23)

四方八方から取り囲む幾千の危険に対して身を守るために、魂はどうしたら用心深くなる力を持つことができるのでしょうか？絶えず警戒し、危険はないのだと信じて休息することをしないでいることは、疲れ、消耗し、悩まされることではないのでしょうか？全くそうではありません。慎重さは、最高の平安をもたらします。慎重さは、まどろむこともなく眠ることもない天的な守護者の中に安全と力を持っています。慎重さは、主に信頼し、聖霊の導きのもとでその働きをします。キリスト者は、賢明な者として歩

みます。聖い慎重さに伴う品位は、その人のすべての振る舞いにおいてその人を飾ります。イエス様が見張り守つていてくださるという信仰の安息、その信仰は、愛によつて主に結びつけます。そして聖い慎重さは、主を悲しませたり見捨てたりしない愛から、また主の中にすべてのことのための力を持つ信仰から、それにおのずと生じるのです。

祈り
私の主なる神さま。心に軽率な思いが生じないように、私をお守りださい。すべてのことにおいて、私がつまづきを引き起こすことのないように、信仰者としての慎重さが、常に私を特徴付けますように。アーメン。

課題
一、馬と馬車を完璧に整備するために非常な心遣いをしている人が、次のように言われることがありました。「さあさあ、このことにそんなにいつも苦労をする必要はありませんよ。」と。それに対するその人の答えは「私は、慎重であることに對して十分報いられるこれを、いつも体験していますよ。」と。何と多くのキリスト者が、この学びを必要としていることでしょう。何と多くの新しいキリスト者が、「信仰者が慎重であること」という神のみことばに基づいて、そうあるようにもつともなことです。

二、慎重さ（配慮）は、自分自身を知ることに根ざしています。自分の無力さと自分の心の自己中心性を知れば知るほど、用心深くなる必要性がおおきくなるのです。このように、慎重さ（思慮）は眞の自己否定の要素なのです。

三、慎重さは、信頼の中にその力を持つています。主は、私たちを守るお方です。主は、聖靈が私たちを顧みられることを通して、主の守りを遂行されます。私たちの慎重さは主から來るのでです。

四、慎重さの働きは、私たち自身に限定されるものではありません。それは特に、隣人の怒りを引き起こさないようにして、つまづきの石を置かないようにすることで、私たちの隣人にまで及ぶのです。

ですから、私たちは、もはや互いにさばき合つことのないようにしましよう。いや、それ以上に、兄弟にとつて妨げになるもの、つまづきになるものを置かないように決心しなさい。
(ロマ14・13)

ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまづきとならないように、気をつけなさい。

ユダヤ人にも、ギリシャ人にも、神の教会にも、つまづきを与えないようにしなさい。

(1コリ8・9、10・32)

五、慎重さは、冷静さと熟慮とをもつて主に方法を委ねるために、沈黙することの中に大きな喜びを見いだします。

慎重さは、エペソの町の書記官のことばを大いに尊重します。

「これは否定できない事実ですから、皆さんは静かにして、軽はずみなことをしないようにしなければなりません。」

（使徒19・36）

六、偉大な将軍たちと彼らの勝利の中において、慎重さは臆病ではないことを見る事ができます。慎重さは、最高の勇気と、最も喜ばしい勝利の確信とに通底しています。慎重さは、無分別を警戒しますが、信仰の勇気を強めるのです。

48 金銭

金銭はすべての必要に応じる。

(伝10・19)

私の手で…それ（銀）をあなた（主）に返します。

(士17・3)

だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰つて来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。

(マタ25・27)

キリスト者が、自らの自己否定と慎みの靈を明らかにすべき機会の一つは、この世とその所有物をどう扱うかということに見出すことができます。

世の富を用いる者は用いすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。

(1コリ7・31)

地上のすべての価値や富は、その表現を金銭に見出します。それゆえ、その人がこの世から自由であるかどうかは、特にその人が金銭をどう扱うかに表れます。このことを理解するために、金銭についてなんと言われているかを考慮しなければなりません。

金銭は何を表わしているのでしょうか？それは、人が収入を得る労働を現わし、労働における勤勉さ、熱心さ、能力を表わし、個人的な成功と神が人に賜つたものを表わしています。またそれは、金銭でできることのすべてのものの

象徴であり、他の人々が私に対してもうとする働きの表現であり、私が願つてることを私が成し遂げるために持つ力の表現であり、私の金に依存している事柄に対して、私が行使する影響力の表現であり、金によつて得られるすべての所有物や楽しみの象徴であり、生活をより望ましいものにする地上のすべての象徴であり、そうです、必要不可欠な食物を購入しないでは維持することができない生活そのものの表現です。

地上のものの中で、金銭は、このように最も望ましく有益なもの一つです。金銭がすべての人々によつて、このように評価されるのは驚くに当たりません。金銭の危険とは何でしようか？聖書と経験が用心深くあるようにと私たちに警告しているところの、金銭によつて犯される罪とは何でしようか？十分な金があるかどうかがわからないという心配が挙げられます。過剰に金銭を追い求める強欲が挙げられます。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと云つて心配するのはやめなさい。

(マタ6・31)

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしされでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たもの

ではなく、「この世から出たものだからです。

(ヨハニス福音書 15・16)

隣人に属するはずのものを、ひどい欺きや盗みを交えないでは、その人に与えないという不正直さが挙げられます。

見なさい。あなたがたの畠の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。

(ヤコブ福音書 5・4)

何でも自分自身のために寄せ集め、他の人のために使わないという、愛の欠如が挙げられます。

ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

アブラハムは言った。「子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。」

(ルカ福音書 16・19、25)

貪欲に富や地所を探し求めるという、金銭愛が挙げられます。

金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなど、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる惡の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもつて自分を刺し通しました。

この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。

(テモテ書 6・9、10、17)

他の人々の分の分け前を差し控えることで、神と貧しい人から盗むことが挙げられます。

あなたの手に善を行なう力があるとき、求める者に、それを拒むな。あなたに財産があるとき、あなたの隣人に向かい、「去つて、また来なさい。あす、あげよう。」と言つな。

(箴言 3・27、28)

金銭の祝福とは何でしようか？もしかしたら、罪の危険があまりにも大きいために、金銭がない方が望ましいのでしょうか？金がないほうが良いのではないでしょうか？いいえ。靈的生活においても、金銭には次のような大きな祝福があるのです。

一、勤勉に骨折つて働き節約する訓練として、

見よ。私がよいと見たこと、好ましい」とは、神がその人に許されるいのちの日数の間、日の下で骨折るすべての労苦のうちに、しあわせを見つけて、食べたり飲んだりすることだ。これが人の受ける分なのだ。実に神はすべての人間に富と財宝を与え、これを楽しむことを許し、自分の受けける分を受け、自分の労苦を喜ぶようにされた。これこそが神の賜物である。

(伝5・18、19)

二、私たちの働きに対する神の祝福の表現として、

無精者の手は人を貧乏にし、勤勉な者の手は人を富ます。主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。

(箴10・4、22)

三、私たちが神のために控えることなく忠実に所有し費やし、そして神の義に適つて貧しい人への惜しみない溢れるばかりの愛を示す機会として、

今あなたがたの余裕が彼らの欠乏を補つなら、彼らの余裕もまた、あなたがたの欠乏を補うことになるのです。こうして、平等になるのです。「多く集めた者も余るところがなく、少し集めた者も足りないところがなかつた」と書いてあるとおりです。

(2コリ8・14、15)

四、また、天の祝福である金銭を人々に分け与える善行によつて神に栄光を帰する機会として、

なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知つて、神をあがめることでしょう。

(2コリ9・12、13)

五、そしてイエス様の真実のゆえに、私たちが天に宝を積むことができる」ととして。

イエスは、彼に言られた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰つて、あなたの持ち物を売り払つて貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」

(マタ19・21)

それでは、危険から自由にされて金銭の祝福に至る道とは何でしようか？

神に、あなたの金銭に対する主人になつていただきましょう。あなたのすべての金銭を、祈りに対する神からの答えとして与えられているものとし、感謝をもつて受け取りなさい。

私たちの日々との糧をきよつとお与えください。

(マタ6・11)

神に属するものとして金錢をすべて神の御前に明け渡しますよう。

ダビデとともにこゝう言いましょう。「すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにさげたにすぎません。」（1歴29・14）と。

あなたの金錢を、靈的生活の一部として扱いましょう。金や銀ではなく、この上なく尊い血潮によつて贖われた者として、金錢を受け取り、所有し、用いましょう。

ところがザアカイは立つて、主に言つた。「主よ。」覗ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取つた物は、四倍にして返します。」（ルカ19・8）

金錢と財産について、神のみことばが語つてることについて、特別の学びをしましよう。御父のみことばだけが、御父の子どもが金錢という祝福をどのように用いるべきかを教えています。

それがあなたに与えられたのは、あなたひとりのためにではなく、あなたの兄弟（姉妹）たちのためにも与えられたのだ、という事実をじっくりと考えましよう。金錢の祝福は、それによつて他の人々に良いことを行い、その人たちを喜ばせるために用いるべきです。

このように労苦して弱い者を助けなければならぬこと、また、主イエス自身が、「受けるよりも与えるほうが幸

いである。」と言われたみことばを思い出すべき」とを、私は、万事につけ、あなたがたに示して來たのです。（使20・35）

金錢の祝福は、神の神殿を建て上げるために、神のご支配を広げるために、御父と神の国の奉仕に献げることができることを、特に覚えましよう。聖書の中で述べられている靈的祝福の時はいつでも、神の目的のために喜びをもつて献げる時でした。聖靈の満たしが与えられていることも、主に金錢を献げることで外に表れるのです。

すると、一族の長たち、イスラエル各部族の長たち、千人隊、百人隊の長たち、王の仕事の係長たちは、みずから進んで、…こうして、民は自分たちのみずから進んでささげた物について喜んだ。彼らは全き心を持ち、みずから進んで主にさげたからである。ダビデ王もまた、大いに喜んだ。（1歴29・6、9）

彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかつた。地所や家を持つてゐる者は、それを売り、代金を携えて來た。

（使4・34）

キリスト者の方々。次のことを理解しましよう。あらゆる最も深い心の思いとその最も靈的な働きは、私たちが自らの金錢を扱う扱い方に自身を表します。神への愛、隣人への愛、信仰によるこの世に対する勝利、永遠の富への望み、管理者としての忠実さ、神に仕える喜び、心からの自

己否定、聖い慎重さ、神の子どもの輝かしい自由——これらの全ては金銭の用い方において見ることができるので

金銭の行き先です。

す。金銭は、神との最も輝かしい交わりの手段として、神に栄光を帰し神に仕えることができる、祝福の喜び溢れるものとなり得るのです。

二、第一歴代誌第二十九章のダビデのすばらしい祈りに精通しましょう。それを私たちの魂に迎え入れましょう。それは私たちに、喜んで分け与えることから湧き出る神の祝福と賛美を、私たちに教えてくれるのです。

祈り

主なる神さま。私の金銭が私の靈的生活と、どれほど密接に関与しているかを見分けさせてください。聖靈が私を導き聖別してくださり、私のすべての収入を得ることと受け取ること、金銭を持つことと施すこととが、いつもあなたに喜ばれ、私の魂の祝福となりますように。アーメン。

課題

一、ジョン・ウエスレーは、金銭の用い方に關する三つの法則があるといつも言つていました。それは、ウエスレーが仕事をする人々に伝え、伝えられた人々がその有益さを体験したと確信していることです。

・できるだけ多くの金を稼ぎなさい。勤勉でありなさい。

・できるだけ多く蓄えなさい。浪費しないで、質素で堅実に生活しなさい。

・できるだけ多くの金銭を与えるなさい。それがあなたにとつても他の人々にとつても永続的な祝福となる

49 キリスト者の自由

罪から解放されて、義の奴隸となつたのです。

・罪から解放されて神の奴隸となり、聖潔に至る実を得たのです。・

(ロマ6・18、22)

しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され……いるのです。

(ロマ7・6)

なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御靈の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

(ロマ8・2)

自由は聖書の中で、神の子どもの最大の特權の一つとして数えられています。自由に対してほど国家が大きな犠牲を払つたものは、歴史上他にありません。奴隸であることには、人間が陥りうる最低の状態です。なぜなら、もはやその人は自分の生活を持つことができないからです。自由は、人の本性上最も深い必要です。

自由とは、何物であつてもその自然の性質に従つて成長するための条件です。自由なくしては、それが定められているものを得ることができず、そうあるべきものになることができないのです。これは動物においても人間においても、身体的のことにおいても靈的なことにおいても、眞実です。神がイスラエルの民をエジプトの奴隸状態から贖い出して、神の民としての輝かしい自由の中に導き入れるこ

とを選ばれたのはこの理由のためでした。それは、私たちを罪の奴隸状態から贖い出して、神の子どもとしての自由の中に導き入れてくださつたことの永遠の型です。

粘土やれんがの激しい労働や、烟のあらゆる労働など、すべて、彼らに課する過酷な労働で、彼らの生活を苦しめた。

(出1・14)

わたしは、あなたをエジプトの国、奴隸の家から連れ出した、あなたの神、主である。

(出20・2)

この点についてイエス様は、次のように言わされました。「もし子（キリスト）があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」（ヨハ8・36）と。そして聖書は私たちに、キリストが私たちを解放してくれましたその自由にしつかりと立つようにと教えていました。その自由を洞察することによって、神の恵みが私たちのために用意している、人生の最も偉大な栄光の一つが、私たちに開かれるのです。

キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しつかり立て、またと奴隸のくびきを負わせられないようになさい。

(ガラ5・1)

聖別について扱うローマ人への手紙の三つの箇所において、自由の三つの内容が語られています。六章においては罪からの自由、七章においては律法からの自由、八章においては罪の原理からの自由です。

一、罪からの自由

死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

罪から解放されて、義の奴隸となつたのです。

しかし今は、罪から解放されて神の奴隸となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。

(ロマ6・7、18、22)

罪は、人をその配下に置いて虜にし、悪魔の奴隸になるよう強制する、人を支配する力として表現されています。イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なつている者はみな、罪の奴隸です。」(ヨハ8・34)

私たちは、律法が靈的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。私のからだの中には異なつた律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。

(ロマ7・14、23)

キリストの死によって、またキリストにあってキリスト者は主と一つであつて、罪の支配から完全に自由にされています。罪はもはやキリスト者に對して力を持つています。それでもまだキリスト者が罪を犯すとしたら、それは彼が信仰による彼の自由を知らないために、罪が自分を支配することを、彼がまだ罪に許しているからです。しかし、神のみことばがこのように確証していることを、信仰によって完全に受け入れるなら、そのとき罪はキリスト者を支配する力を持ちません。「自分が罪から自由にされていると信じる信仰によって、キリスト者は罪を征服するのです。

また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。(ロマ6・13、14)

二、律法からの自由

これは、罪からの自由よりも深い恵みの生活へと私たちを導きます。聖書によれば、律法と罪はいつも相伴つています。「罪の力は律法です。」(1コリ15・56) 律法は、違反を増し加えるに過ぎません。

では、「この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによつて、罪として明らかにされ、戒めによつて、極度に罪深いものとなりました。」（ロマ7・1-3）

律法は、私たちの罪深さを明らかにすることはできても、私たちが罪に対抗するのを助けることはできません。逆に、律法が完全な服従を要求することによつて、罪の力に打ち勝つ望みを失わせるのです。自分が律法から自由にされていることをはつきりと見定めていなキリスト者は、いつも罪の下にとどまるのです。

私たちが肉にあつたときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。（ロマ7・5）

キリストと律法が、同時に私たちを支配することはできません。信仰者として律法を満たそうとするあらゆる努力によつて、私たちは罪のとりこにされるのです。

私のからだの中には異なつた律法があつて、それが私の心の律法に対し戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。

（ロマ7・2-3）

キリスト者は律法から、私たちの力を超えている「あなたは：・しなければならない」という律法から、完全に自由になつていることを知らなければなりません。その時初めで私たちは、罪から自由になるとはどういうことかを知るのです。

三、罪の原理からの自由もあります
私たちのからだの中にある罪の力から実際に自由になることです。私たちがキリストにあつて持つ罪からの自由と律法からの自由は、神の御靈によつて私たちのために内面的に備えられるのです。

キリスト・イエスにある、いのちの御靈の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。（ロマ8・2）

私たちの内におられる聖靈が、私たちを支配している律法に取つて代わるのです。

御靈によつて導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。御靈によつて導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。（ガラ5・18）

律法からの解放は、外面向の何かではなく、御靈が私たちの内に支配権を得て私たちを導かれる程度に応じて行われるのです。

主は御靈です。そして、主の御靈のあるところには自由があります。（ガラ3・17）

御靈の原理が私たちを支配するに従つて、私たちは罪の原理から自由にされるのです。そのとき私たちは、自由に神に仕えることができるのです。

しかし、御靈によつて導かれるなり、あなたがたは律法の下にはいません。

(ガラ5・18)

「自由」とは、私たちがそうありたい、そうあるべきであるというものになることを何物にも妨げられないという状態を表しています。言い換えれば自由であるとは、私がしたいことをすることができるということです。私たちを支配する罪の力、私たちに対抗する律法の力、私たちを妨げる私たちの内にある罪の原理の力。しかし、聖靈の自由の中に留まる人は本当に自由な人であつて、その人がそうありたい、そうあるべきであるというものになることから、何物もその人を妨げたり邪魔したりすることはできません。そのとき、上に向かつて成長することが木の性質であつて、すべての障害物から自由になるにつれて成長するよう、神の子どもも、そうあるべきもの、そうあるはずのものへと成長するのです。そして、聖靈がキリスト者との自由へと導くにつれて、そこに信仰生活のための力の喜ばしい自覚が湧き上ります。キリスト者は喜びに溢れて叫びます。「私は、私を強くしてくださる方によつて、どんなことでもできるのです。」(ヒリ4・13)

「神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる

祈り
囚われ人に対して自由を告げ知らせるために、聖靈の満たしを受けられた神の御子であられるイエス様。私をも本当に自由にしてください。あなたにある、私の主なるのちの御靈によつて、罪と死の原理から私を自由にしてください。私はあなたの身代金によつて買い戻された者です。どうぞ私を、あなたに自由にされた者として、何物にも妨げられることなくあなたに仕える者として、生かしてください。アーメン。

課題

一、キリスト者の自由はその人の全人生に広がります。キリスト者はこの世の制度と教えについて自由です。

あなたがたは、代価をもつて買われたのです。人間の奴隸となつてはいけません。

(1コリ7・23)

もしあながたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、「すがるな。味わうな。さわるな。」というような定めに縛られるのですか。

(コロ2・20、21)

勝利の行列に加え…てくださいます。」(2コリ2・1)
4)と。

キリスト者は、この世に対して自由であり、神が与えてくださったものを用いることにおいても自由です。彼はそれを所有し、あるいは分け与え、それを楽しみ、それを獻げる力を持ちます。

私たちを神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとなるないように、気をつけなさい。 (1コリ8・8、9)

二、この自由は決して無法ではありません。私たちは聖霊にあって神に仕えることにより、罪と律法から自由です。私たちは律法の下にはいません。そうではなくて、私たちを愛してくださった主に対して、私たちは自由な選択によって、愛をもって自分自身をささげるのです。

もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きる」とになる、と信じます。

(ロマ6・8)

兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもつて互いに仕えなさい。 (ガラ5・13)

イエスは…言われた。「もしあなたがたが、わたしの…とばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

「ですから、もし子があながたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

私たちは律法の下にいるのではありません。しかし、律法無のではありません。私たちは、律法の中に、新しい

さらに高いレベルの律法の中にいるのです。私たちの原理であり基準である「いのちの御靈の原理」「自由の律法」「私たちの心の中に書かれた律法」の中にいるのです。

なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御靈の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。 (ロマ8・2)

ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによつて祝福されます。 (ヤコ1・25)

三、この自由は、それが存在するのに必要な資源を、みことばから得、またみことばの中に持つています。みことばが私の内に留まるほど、真理が私の内に生きれば生きるほど、私はますます自由になります。

(ヨハ8・31、32、36)

四、自由は愛の中に自らを明らかにします。私は律法から人間から制度から自由であり、今やキリストのように他の人々のために自分自身をささげることができるのです。

ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのない

ようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとつて妨げになるもの、つまづきになるものを置かないように決心しなさい。

肉を食べず、ぶどう酒を飲まず、そのほか兄弟のつまづきになることをしないのは良いことなのです。

(ロマ14・13、21)

五、神と私たちの隣人に愛をもつて仕えるこの輝かしい自由は、靈的な事柄なのです。私たちはどんな手段によつても、この自由を捕まえて自分のものにしてしまうことはできません。この自由は、ただ聖靈にあるいはのちによつて知られていくのです。

しかし、御靈によつて導かれるならあなたがたは律法の下にはいません。

(ガラ5・18)

自由にするのは御靈です。私たちは、御靈が神の御子の輝かしい自由へと案内しようとされる導きを受け入れましょう。

なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御靈の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

(ロマ8・2)

50 成長

また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはります」。

(マル4・26～28)

かしらに堅く結びつく」とをしません。このかしらがもどになり、からだ全体は、関節と筋によつて養われ、結び合われされて、神によつて成長させられるのです。

(コロ2・19)

むしろ、愛をもつて真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによつて、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によつて、しっかりと組み合わされ、結び合われ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

(エペ4・15、16)

死はじつと動かないことであり、いのちは常に活動と進歩なのです。増加、成長はすべてのいのちの法則であり、その結果として人の中の新しいいのちは、増加し常により強くなることが定められています。種と土の中に成長のいのちと力があり、その力によつて植物が十分に成長し果実を

実らせるように、永遠のいのちの種の中には成長を促す力があり、そのいのちも私たちが完全な人となりキリストの満ち満ちた身たけになるまで、神の成長の力によつて絶えず増加し成長するのです。

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一一致とに達し、完全におとなになつて、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。(エペ4・13)

兄弟たち。あなたがたのことについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。そうするのが当然なのです。なぜならあなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです。それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保つていています。

(2テサ1・3、4)

それ自身で芽を出し成長し果実を実らせる、この種のたとえにおいて主は、靈的生活の成長についての二つの最も大切な教訓を、私たちに教えておられます。一つはそれ自身に十分な備えがあるという教えであり、もう一つは段階的に進むという教えです。

第一の「自分には十分な備えがある」という教えは、「恵みによつてさらに成長し前進するために、私たちは何をす

べきでしょうか？」と尋ねる人たちのためのものです。主は体について、次のように言っておられます。

正しい者は、なつめやしの木のように栄え、レバノンの杉のように育ちます。彼らは、主の家に植えられ、私たちの神の大庭で栄えます。 (詩92・12、13)

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

(マタ6・27、28)

主はここで、靈的ないのちが成長するために、私たちは何もすることができないし、何もする必要がない、と私たちに語つておられるのです。

人が眠っている間に種がどのように芽を出し、丈が伸び（どのようにしてか、人はそれを知りません）大地がそれ自身の実りをもたらしたことを、あなたは見てはいませんか？人が一度種を蒔くと、その人は成長のための世話を神に頼らなければなりません。その人は心配することはできません。信頼して安心すべきです。

それでは人は何をすべきでしようか？人は何もできません。いのちの力がやつて来るのは内側から、すなわち人の中にあたえられたいのちから、御靈からなのです。成長それ自身のために、人は何も貢献できません。成長することは、当然人に与えられるはずです。

人でできることは、いのちが成長できるようにすることです。そのいのちを妨げるすべてのものを捨て去り、手放さなければなりません。植物が育つべき土壤から場所と力を奪つてしまふいばらとあざみがあるなら、それらを抜き捨てることができます。

また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。

(マタ13・22、23)

わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もつと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。 (ヨハ15・1、2)

植物は、それだけが土に植えられなければなりません。農夫はこのことに注意を払います。そうすれば植物は、自ずからすくすく成長するのです。そこでキリスト者は、新しいのちの成長を妨げうるものを捨て去らなければなりません

せん。人はその心を新しいのちに、完全に一心なく明け渡さなければなりません。それだけを持ち続けそれを満たすことで、新しいのちが自由に妨げられることなく成長を遂げることができます。

し、あふれるばかり感謝しなさい。 (コロ2・6、7)

私たちのために、ぶどう畑を荒らす狐や子狐を捕えておくれ。私たちのぶどう畑は花盛りだから。 (雅2・15)

「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。 (ヘブ12・1)

主のたとえの第二の教えは、成長は段階的に進むということです。「苗、そして次に、その後で次に穂の中に実が入ります。」一度にすべてを期待してはなりません。神に時を与えるでしょう。信仰と忍耐によって、私たちは約束のものを手にすることができます。この信仰とは、キリストのうちにすべてのものを持つていることを知っている信仰であり、この忍耐とは、神の支配の裁定と順序に従つて、すべての物事の実現にはその時があることを期待する忍耐です。神に時を与えるでしょう。新しいのちに時を委ねましよう。植物が成長するのは、土の中にとどまり続けることによります。新しいのちが成長するのは、恵みの中に、神が私たちを植え付けてくださったキリストの中に留まり続けることによります。

「こういうのですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。

(ヤコ5・7)

農夫は、植物が望んでいる食物や飲み物を与えることもできます。彼は必要に応じて、土壤に肥料を与え、水で潤すことができます。そこでキリスト者は新しいのちが、みことばから栄養を、御靈の生ける水を、祈りによつて与えられることを理解しなければなりません。新しいのちは、キリストの中に植えられたのです。そのキリストから、聖なる成長が増し加わります。信仰を働かせてキリストに根ざし、留まりなさい。いのちは自ずから成長します。

あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあつて歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅く

永遠のいのちが持つべきものをそれに与え、それを妨げうるものを取り去りましょう。いのちはそれ自身で成長し、増し加わります。

そうです。新しいのちに十分な時間を与えましょう。祈りの時間を、神との交わりの時間を、信仰の継続的な実践の時間を、この世から離れ続いている時間を与えましょう。時間をかけましょう。ゆっくりと確実に、密かにしかし現実に、明らかな弱さの内に、しかし天の力をもつて、神からの成長は、キリストにある完全な人をもたらします。

祈り

主なる神さま。神の子どもたちの成長と進歩はあなたの御手の内にある、という彼らの信仰を、恵みをもつて強めてください。どんなに尊い力に満ちたいのちが、神からもたらされる成長で成長するいのちが、あなたご自身によつて彼らの内に植え付けられることを分からせてください。信仰と忍耐によつて、彼らが約束のものを受け継ぐことができるようにしてください。そして彼らが信仰によつて、新しいのちがさらに前進するのを妨げるすべてのものを除き去ることを、彼らに教えてください。そして、彼らの中で行われるあなたのみわざを輝かせてください。

アーメン。

にあつて成長しなければなりません。なぜなら、体はキリストから成長を得るからです。信仰によつてキリストの中に留まること、それが主要なことです。

二、信仰は、静かな安らぎの中に置かれなければならないこと、信仰の成長は、神の御手の中にあるゆりの成長のようであること、私たちが増え強くなるのを主が見ておられることがあります。

三、「この堅い喜びに満ちた信仰によつて私たちは、「神の榮光ある権能に従い、あらゆる力をもつて強くされて、忍耐と寛容を尽くし…」（四福音書1章11節）となるのです。

四、神が私たちの成長のために配慮していくくださるという信仰は、すべての不安を取り去つて、私たちが行うべき次の二つのことを行う勇気を与えてくれます。一つは、新しいのちへの障害となりうるもの捨て去ること、もう一つは、新しいのちの成長に役立つものを取り入れることです。

五、植え付けることと成長することの違いをよく観察します。植えることは一瞬の働きです。一瞬で土地は種を受け取ります。それから、成長がゆっくりとやつてきます。遅れることなく即座に、罪人はみことばを受け入れなければなりません。回心がただちにそれに続きます。それから種の成長が時間をかけて行われるのです。

課題

一、植物にとって第一の供給者は太陽です。植物は日光の中に立ち、それから力を引き出すのです。キリスト者にとっても、自分がキリストの中にあるということが、第一のことです。キリストがすべてです。キリスト者はキリスト

六、大切なのはキリストです。キリストから、キリストにあつて、私たちの成長があります。主が、果実を実らせる土壤なのです。私たちは、どうしてそうなるのかを知りません。日々、主との親しい交わりを保ちましょう。

5.1 聖書を調べる

どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。

(詩1-19・97)

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。

(ヨハ5・39)

みことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかつたからです。

(ヘブ4・2)

この本の始め（「日々のあゆみ」第一集）のところで、恵みの生活において神のみことばを用いることを、何章かにわたつて述べてきました。ここでもう一度、この極めて重要な点に戻りたいと思います。新しいキリスト者に対しても次の呼びかけに向き合うように、いくら熱心に緊急性をもつて働きかけても十分すぎるということはありません。あなたの靈的ないのちは、神のみことばをあなたが用いることに大いに依存しています。人は、神の口から出て来るみことばによって生きるのです。ですから、神のみことばをどのように適切に用いるべきかを学ぶために、心を全くして尋ね求めなければなりません。この目的のために、次の提案を受け入れてください。

私は心を全くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。

しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。「この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去つて行く支配者たちの知恵でもありません。

ところで、私たちは、この世の靈を受けたのではなく、神の御靈を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わつたものを、私たちが知るためです。生まれながらの人間は、神の御靈に属することを受け入れません。彼らは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御靈のことは御靈によってわきまえるものだからです。

(1コリ2・6、12、14)

私たちの理解を否定して、へりくだりをもつて神の御靈にいつでも従えるように備えましょう。あらゆる場合に、みことばを読むに当たつて静まりましょう。そして、自分自身にこう言いましょう。「このみことばを、愛して私の内に住まわせるために、今それを、心で受け取ります。」

理解力よりもっと、心でみことばを読みましょう。理解力によって私は知り把握し、心によつて私は熱望し、愛し、しつかりと把握します。理解力を心のしもべとしましょう。靈的な事柄を受け入れることができない肉の性質としての理解力に注意しましょう。

私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するもので、(詩119・10、11、47)

みことばを、いつも生ける神との交わりの中で読みます。ことばの力は、ことばの出所である人についての私の確信に依存しています。まず第一に、主が近くにいて愛していくくださることを深く思つて、生ける神との愛の交わりの中に自分自身を置きましょう。永遠の神である主が、私たちと語つておられることを全く確信して、みことばに取り組みましょう。そして、神に、神ご自身に聞き入るために、静まりましょう。そうすれば、みことばは確実に、私たちにとつて大いなる祝福となります。

それで、エリはサムエルに言つた。「行つて、おやすみ。今度呼ばれたら、『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。」サムエルは行つて、自分の所で寝た。そのうちに主が来られ、そばに立つて、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。(1サム3・9、10)

みことばを、その中に神の御靈が宿り、信じる者に確実に働く生きたみことばとして読みましょう。みことばは種です。種はいのちを持ち、成長してその実を生じます。みことばはいのちを持ち、自分で成長して実を生じます。

また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず、実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはいります。」

(マル4・26～28)

もしあなたがこのことをよく理解できないなら、その力を感じないなら、そのみことばを心にとどめて、じつくりと黙想しましょう。みことばはそれ自身で、私たちの中に働きと成長を生じ始めます。神の御靈は、みことばとともに、みことばの中におられます。

私は、あなたの戒めに思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。

「このとおり、私は、あなたの戒めを慕っています。どうかあなたの義によつて、私を生かしてください。私は私の愛するあなたの仰せに手を差し伸べ、あなたのおかげに思いを潜めましょう。

高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めましたが、私は心を尽くして、あなたの戒めを守ります。

(詩119・15、40、48、69)

聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

(2テモ3・16、17)

みことばを聞くだけではなく、それを実行する者となることを確信して、みことばを読みましょう。このみことばによつて、神は私に何をさせようとしておられるのか？もしその答えが、私がそのみことばを信じ、それを実現するため神に信頼することであるなら、それを即座に、心から行いましょう。もし、みことばが、私たちが為すべきことを命じているなら、ただちに服従してそれを行いましょう。

ああ、みことばを実行することと、みことばが語り望んでいる通りの自分であるために、またそう行動するために自分自身を獻げることには、ことばに尽くすことのできない祝福があるのです。みことばを聞くだけの者ではなく、実行する者になります。

ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによつて祝福されます。

（ヤコ1・21、25）

だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破つたり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。まことに、あなたがたに告げます。もしあながたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいりません。

（マタ5・19、20）

どんなにか私は、あなたのみおしえを愛している」とでしょう。これが一日中、私の思いとなつています。

（詩119・97）

忍耐によつてあなたは訓練され、みことばにさらに親しむようになり、みことばが、働き始めます。私たちが、みことばを理解できなくとも、落胆してはなりません。みことばを握り、勇気を出し、みことばに時間をかけましょう。後になって、みことばが自らを説明するのです。ダビデは、みことばを理解するため、昼も夜も默想しなければなりませんでした。

（ルカ11・28）

しかし、イエスは言われた。「いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」

聖書を探索しつつ、みことばを読みましょう。聖書の最良の解説は聖書自身です。一つの点について、三つか四つの聖書箇所を取り上げましょう。それらを並べて比較します。それらが、どこで一致し、どこで違があるか、どこで同じことを語り、再度何か別のことを語っているかを見ます。神が同じ主題について別の時に語られたことによつて、神のみことばがいつぶんに明らかで確かなものとなるようになります。これが最も安全で最良の解説です。

聖書の著者（例ではヨハネ）でさえも、「また聖書の別のところには」と記して聖書を調べさせる教え方をとりました。

また聖書の別のところには、「彼らは自分たちが突き刺した方を見る。」と言われているからである。

（ヨハ19・37）

主の書物を調べて読め。これらのもののうちどれも失われていない。それぞれ自分の連れ合いを失くものはいない。それは、主の口がこれを命じ、主の御靈が、これらを集めたからである。

（イザ34・16）

こここのユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。

（使17・11）

この方法が、あまりにも多くの時間と労力を必要とすることに、不平を言つてはなりません。この方法は苦労に値します。

私たちの努力は報われます。一体、私たちが苦しまないで得られるものなどあるのでしょうか？

銀のように、これを探し、隠された宝のように、これを探り出すなら、そのとき、あなたは、主を恐れる」と悟り、神の知識を見いだそう。

（箴2・4、5）

いのちのパンでも、私たちの額に汗して食べなければなりません。天に行こうとする人は、苦しみを受けることなしにそこに行くことは決してないのです。聖書を探り求めます。それはあなたに、豊かに報いてくれます。

新しいキリスト者の方々。あなたへの、私の最後の最も真剣な言葉は次のことです。あなたの成長とあなたの力とあなたのは、あなたが神のみことばをどう扱うかに依存しているのです。ですから、神のみことばを愛しなさい。それを蜂蜜よりも甘いもの、幾千の金銀よりも価値あるものと見積もりなさい。みことばの中で神は、あなたに主のみこころを明らかにすることがお出来になり、またそうしようとされるのです。みことばの中でイエス様は、ご自身とすべての主の恵みを伝えられるのです。みことばの中で、聖靈は神のみこころに従つて、あなたの心とあなたのですべての思いを新しくするために近づかれるのです。ああ、ですから、私たちがただ単に信仰が後退するのを防ぐためにみことばを読むのではなく、神がみことばであなたを満たし、神があなたにおいてみことばを成就するように

あなた自身を明け渡すことを、地上におけるあなたの最も重要な務めの一つと見なしなさい。

う。そして、神のみことばの栄光について教えられていることの十分な印象を受け取るまで、この方法で探求しますよう。

祈り

主なる神様。あなたが私たちに、あなたののみことばによつて語つてくださり、あなたののみことばによつてあなたのみこころに、あなたのご意思に、あなたのご愛に近づく

ことができるとは、何という恵みでしょう。ああ、あなたのみことばに逆らう私たちの罪をお赦しください。そして主よ。新しいいのちが私たちの内におられる聖靈によつて強められ、その熱く願うことのすべてが、あなたののみことばの中に留まることとなりますように。アーメン。

課題

聖書の中ほどに詩篇第百十九篇があり、その中に神のみことばへの賛美と愛が、非常にはつきりと表明されています。この詩篇の箇所を通読するだけでは、私たちにとつて十分ではありません。私たちはその主要なポイントを取り上げ、これらのポイントのそれぞれに關して、いくつかの節を拾い出し、違う箇所では何が語られているかを探求しなければなりません。たとえば、次のようなポイントを取り上げ、答えがどのように示されているかを観察しますよ

例一、みことばが与える祝福（詩119）

- 1 幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによつて歩む人々。
- 2 幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々。
- 3 そうすれば、私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることがないでしょう。
- 4 どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従つてそれを守ることです。
- 5 あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。
- 6 私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでいます。
- 7 まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。
- 8 私のたましいは、ちりに打ち伏しています。あなたのみことばのとおりに私を生かしてください。
- 9 私はまた、あなたのさとしを王たちの前で述べ、しかも私は恥を見ることはないでしょう。
- 10 私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。

例二、この詩篇の中で、神のみことばに与えられている
名称

主のみおしえ、主のさとし、主の道、戒め、あなたの
おきて、あなたの仰せ、あなたの義のさばき

例三、私たちがみことばを扱うべき方法

観察する、歩む、保つ、心に留める…

例四、神の御教えを求める祈り

5、10、12、18、19、26節

例五、みことばに従うために自らをささげる

93、105、106、112、128、133節

例六、私たちの祈りの土台である神のみことば

41、49、58、76、107、116、170節

例七、祈りにおいて確信をもつことの基盤としての遵守

77、159、176節

例八、祈りが聞かされることを約束していただくための遵守

8、17、33、34、44節

例九、みことばを遵守する力

32、36、41、42、117、135、146節

例十、神のみことばをたたえる

54、72、97、129、130、144節

例十一、服従するとの確信に満ちた告白
102、110、121、168節

例十二、「あなた」と「私」、「あなたのもの」と「私
のもの」ということばを用いることに見られる神との個人
的な交わり

私はわずかのポイントと節について述べたにすぎません。
神の御靈が私たちに与えたいと熱望しておられる、みこと
ばに関する思いで、私たちの心が満たされるようになるま
で、さらに探求し、それらを心に留めましょう。

信仰の人ジョージ・ミュラーのことばを、大いなる思慮深
きをもつて読みましょう。

「私たちの靈的生活の力は、神のみことばが私たちの生活
と私たちの思いに占める程度に従うのです。五十四年の経
験の後、私はこのことを厳肅に宣言することができます。
私は回心して三年間はほとんどみことばを用いません
でした。私が熱心にみことばを探るようになったとき以
来、祝福はすばらしいものになりました。そのとき以来私
は聖書全体を百回ほど通して読みましたが、読むたび毎に
喜びが増し加わりました。それを新しく読み始めたときは
いつでも、それは新しい本として私の前に現われました。
忠実に日々聖書を探索することにどれほど大きな祝福があ
るか、私は言い表わすことができません。神のみことばを
楽しむためにまとまつた時間を使わない日は、私にとつて
それは失われた日です。」

友人たちほどときどき言います。『私はすることが多いので、規則的に聖書を学ぶ時間を見つけられません』と。しかし、私よりも多く働かなければならない人は少ないと思います。私が神との親密な交わりを持つまでは、自分の仕事を決して始めないことを私の決まりとしています。その後で私はその日の仕事に、つまり神の働きに、数分間の祈りを挟みつつ、心を込めて取り組むのです。』

52 完成者である主

私はいと高き方、神に呼ばわります。私のために、すべてを成し遂げてくださる神に。

(詩57・2)

主は私にかかるすべてのことを、成し遂げてくださいます。

(詩138・8)

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じています。

(ピリ1・6)

というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がどこしにありますように。アーメン。 (ロマ11・36)

私たちは、ダビデが一度不信仰によつて勇気を失い、次のように言つたのを読みます。「ダビデは心の中で言つた。『私はいつか、いまに、サウルの手によつて滅ぼされるだろう。』」(1サムエル27・1)と。同様に、たとえキリスト者であつても、自分がいつの日か滅ぼされると恐れるようになるかも知れません。これは、その人が自分自身と自分の中にあるものを見て、自分のすべての信頼を神の上に置かないことが原因です。それは彼が、神を完成者として知らないからです。「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」(黙22・13)という主の御名の意味するものを、彼はまだ知りません。もし私が、「初めであるお

方」として神を本当に信じるなら、私はまた神を、働きを継続するお方として信じなければなりません。

神は最初です。

「あなたがたのうちに良い働きを始められた方…」

(ピリ1・6)

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び…」 (ヨハ15・16)

私たちがキリスト者になり、新しいのちを持つことは、世界の基が置かれる前に、神が自由に選ばれたことの結果です。

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。私たちは彼にあつて御国を受け継ぐ者ともなつたのです。私たちは、みこころにより「計画のままをみな実現される方の目的に従つて、このようにあらかじめ定められていたのです。

(Hペ1・4、11)

まだ回心していない人たちは、この選びに入つていません。その人たちのためには、恵みと、明け渡しへの招きが提供されています。恵みの中に入る人たちは、神に愛されている者であることの全き祝福を見出します。

次の真理をしつかり保つことは非常に大切です。神は良い働きを始めておられます。そこで、神について熟考する

とは、神はその働きを完成させてくださる方であるという確信をも強めます。神の忠実さ、神の愛、神の力のすべてが、神はご自身が始めた良い働きを完成されることを保証するのです。神の変わることのない忠実さに関するいば、神がどんなに多くの誓いを立てられたかを読みなさい。あなたの魂はそれによつて安らい、勇気を見出すでしょう。

見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行つても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。

(創28・15)

「このことは、わたしにとつては、ノアの日のようだ。わたしは、ノアの洪水をもう地上に送らないと誓つたが、そのように、あなたを怒らず、あなたを責めないとわたしは誓う。たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」とあなたをあわれる主は仰せられる。

(イザ54・9、10)

それでは、どのようにして神は、ご自身のみわざを完了させられるのでしょうか？神にその起源をもつていることは、神によつて保持され、やがて神に至り、神の栄光をもたらすのです。一時的なものであれ靈的なものであれ、私たちの生活において御父が心配してくださいらないようなものは一

つもありません。なぜならそれらのものは、私たちに永遠にわたつて影響するからです。

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことでの、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

(マタ6・25、34)

昼であれ夜であれ、あなたの魂の静かな成長が前進しなくてもよいときは、一瞬間もありません。もしあなたが信じるなら、御父があなたの面倒を引き受けてくださるのであります。御父が、神の子どもとしてあなたのために定められたことについて——それが多分あなたの考えもおよばない領域の事柄であつても——ご自身の働きを続けられ、完成されないことはひとつもありません。

その日、麗しいぶどう畠、これについて歌え。わたし、主は、それを見守る者。絶えずこれに水を注ぎ、だれも、それをそこなわないように、夜も昼もこれを見守つている。

(イザ27・2、3)

けれども、それには一つの条件があります。あなたは、このことについて神を信頼しなければなりません。あなた

は、信仰によつて、神が働くことを受け入れなければなりません。私たちは、信頼に満ちて、こう言わなければなりません。「主は私に関わることを完成させてくださいます。」

「私たちは、信頼に満ちてこう言わなければなりません。」「私は私のためにすべてのことを行われる神に呼びます。」キリスト者は、あなたの内に神のみわざが継続されて完成されるためのすべての世話は、神ご自身が行われる、という考え方であなたの心を満たしましよう。

金錢を愛する生活をしてはいけません。いま持つているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができるでしょう。」

永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうこと私たちのうちに行ない、あなたがたがみこころを行なうことができるため、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

(ヘブ13・5、6、20、21)

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神

「自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」

(1ペテ5・10)

そして、その完成は、何という栄光でしょう！神は私たちの靈的ないのちにおいて、私たちを神の聖さと神の御子のかたちとに与る者とすることによって、神の御力を現わす用意をしておられます。私たちからなる御子の王国における、すべての祝福された働きのために、神は私たちすべてを装わせ立たせられます。神は私たちのからだを、御子の輝かしい姿のようになってくださいます。私たちは、御子がご自身の者たちをご自身のところに連れてゆくために、天から来てくださるのを待ちます。主は私たちを、すべての主に選ばれた者たちとともに一つの体とされ、受け入れてくださり、神の栄光の中に永遠に住まわせてくださいます。ああ、神がご自身のみわざを完成されないなどと、どうして考えることができましょう？神は確かにそれをなされます。そうしてくださると神を信じるすべての人々のために、神は輝かしくそれをなされます。

新しいキリスト者は、信仰の深い確信に満ちてこう言いましょう。「主は私にかかるすべてのことと成し遂げてくださいます。(詩138・8)」と。必要を覚えるごとに、絶えず、大いなる大胆さをもつてこう言いましょう。「私は神を呼び求める。神は、私に関わるすべてのことを行つてくださる。」と。

そして、私たちのいのちの歌を、次の喜ばしい頌栄としますよう。

「すべてのことが、神から発し、神によつて成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」（ローマ11・36）

私に関わることを完成させてくださる主なる神は、あなたを知ることとあなたに信頼することとを教えてくださいま

す。そして、新しいのちについてのすべての考えが、「私の内に良い働きを始めた方は、それを完成させてくださる」という喜ばしい確信と、手を取り合つて進むようにしてください。アーメン。

課題

一、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

（マタイ10・22）

良く始めるだけでは僅かの利益しかもたらしません。私たちは、初めに持つた望みを、最後までしっかりと保たなければなりません。

もし最初の確信を終わりまでしっかりと保ちさえすれば、私

たちは、キリストにあずかる者となるのです。聞いていながら、御怒りを引き起こしたのはだれでしたか。モーセに率いられてエジプトを出た人々の全部ではありませんか。

（ヘブ3・14、16）

二、新しいのちにあずかっていることを、どのようにして知ることができるのでしょうか？

神の御靈に導かれる人は、だれでも神の子どもです。

（ロマ8・14）

「神が私を受け入れてくださっている」という信仰は、御靈の導きによつて働き、歩むことによつて、成熟し、確証されます。

三、自分が最後まで堪え忍ぶことができるることを、どのようにして私たちは確実に知ることができるでしょうか？完 成者である神への信仰によつてです。私たちは全能の神を、私たちを守るお方として持つのです。誠実をもつて神に自分自身をささげ、神がご自身のみわざを完成してくださると完全に信頼する人は、主がその人をご自分のものとされ、終わりまでしっかりと保つてくださるという、神から来る確信を得るのです。

御父との交わりに生きる神の子どもは、ひとつ心でイエス様を信頼して歩み、「捨てられるかもしれない」というすべての恐れは、あなたから取り去られるでしょう。聖靈によつて押された生ける証印は、私たちを終わりまで耐え忍ばせる確信となるでしょう。